

豊かな日本をどうやってつくるか

— 地方から考える —

2010年6月

島根県知事 溝口善兵衛

- 1 本書の本文（P 1～31）は、私が平成22年1月14日に立命館大学の「知事リレー講義」でおこなった講演を、加筆・修正して再構成したものです。
- 2 「コラム」（P 33～49）は私がこれまでに書いた小文を掲載したものです。
- 3 「付録」（P 51～64）の「自立と分散で豊かな日本を」は私も参加した11県知事ネットワークが作成し、本年5月20日に発表した「政策提言」であり、参考のために本書にそのまま添付したものです。

はじめに

2007年4月に知事に就任した頃のことです。あるテレビ番組で各県の位置を当てるクイズが行われました。残念なことに島根県は、どこにあるのかを知っている人が最も少ない県ということになりました。

島根の位置は、全国の方になかなかわかりづらいのですが、最近では、テレビドラマや映画のロケ地としてたびたび登場するようになり、関心をお持ちの方も次第に増えてきたように思います。島根には、縁結びの出雲大社、世界遺産の石見銀山、城下町松江、山陰の小京都津和野、雄大な自然の隠岐など、県内各地に魅力的な名所・旧跡が数多くあります。

私は高校卒業まで、島根県の西部の益田市で育ちました。大学卒業後は大蔵省に入り、長く公務員として生活し、ほぼ40年ぶりに島根県に戻り、平成19年に知事となりました。

公務員の時代には主に東京で働き、ドイツ、アメリカでも合計8年勤務しました。仕事や旅行を通じ日本の内外を見てきて、島根の良さがだんだんわかってきました。そして今、郷里に住んでみて、あらためて島根は実に住みやすい、いいところだ、と感じております。

島根県は人口が減っている、いわば田舎の県です。東京の友人などから「人口が減り、財政も大変でしょう」とよく言われます。しかし、そのたびに、「東京のような大都市がさらに拡大することが、日本にとって良いことなのだろうか」と思うのです。

そこで私は、島根の知事をしながら、なぜ、島根の発展が遅れたのか、昔から遅れていたのか、東京が発展したのはなぜなのか、考えてきました。

東京は若者が多く集まりながら、出生率が全国一低くなっています。つまり子育てが難しい地域になっています。では、なぜ、東京は子育てが難しい地域になったのか、日本の大都市は、欧米の大都市と比べて緑が少ないのはなぜなのか、雑然として殺伐としたコンクリート・ジャングルのようになっているのはなぜなのか、考えてきました。

真の意味での「豊かさ」とはどのようなものか、日本が、国全体として豊かな国になるということはどういうことなのか、「豊かさ」を求めていく過程の中で、なぜ、地方を大事にすることが必要なのか。このことをこれからお話したいと思います。

目 次

第一章 都市化と国の発展	1
第二章 国の政策で進んだ大都市化	9
第三章 地方が果たす役割	21
第四章 地方の発展と豊かな日本	27
おわりに	31
[コラム] 島根から伝える「地方の世界」	33
1. 古代出雲 —『古事記』や『風土記』の世界	34
2. 島根のこころとからだのリフレッシュスポット	36
3. 美保関 <small>みほのせき</small> の古刹と灯台	39
4. 山あいの古城の町 — 月山 <small>がっさん</small> 山麓	41
5. 松江 — 北堀町 <small>どう</small> の鑿	44
6. あなたも島根で暮らしてみませんか?	46
7. 地方から日本を考える	47
8. 不昧公の時代と現代 —『松江藩の財政危機を救え』を読む	47
[付録] 政策提言「自立と分散で豊かな日本を」	51
— 大都市と地方のこれからについて — 「自立と分散で日本を変えるふるさと知事ネットワーク」による提言 青森県、山形県、石川県、福井県、山梨県、長野県、 奈良県、鳥取県、島根県、高知県、熊本県の11県の知事が 共同で作成し、平成22年5月20日発表	

第一章 都市化と国の発展

島根県は中国地方にあり、広島県の北側に位置し日本海に面しています。日本の国土37万km²のうち、日本の首都、東京の面積が2,187km²に対し島根県はその3倍の6,708km²。人口は、東京都が1,287万人に対し島根県は72万人。東京都の人口は島根県の約18倍です。

島根県の県内総生産は2.5兆円で、東京都の92兆円の約40分の1です。また、島根県は、全国で最も高齢者比率が高く、約30%です。

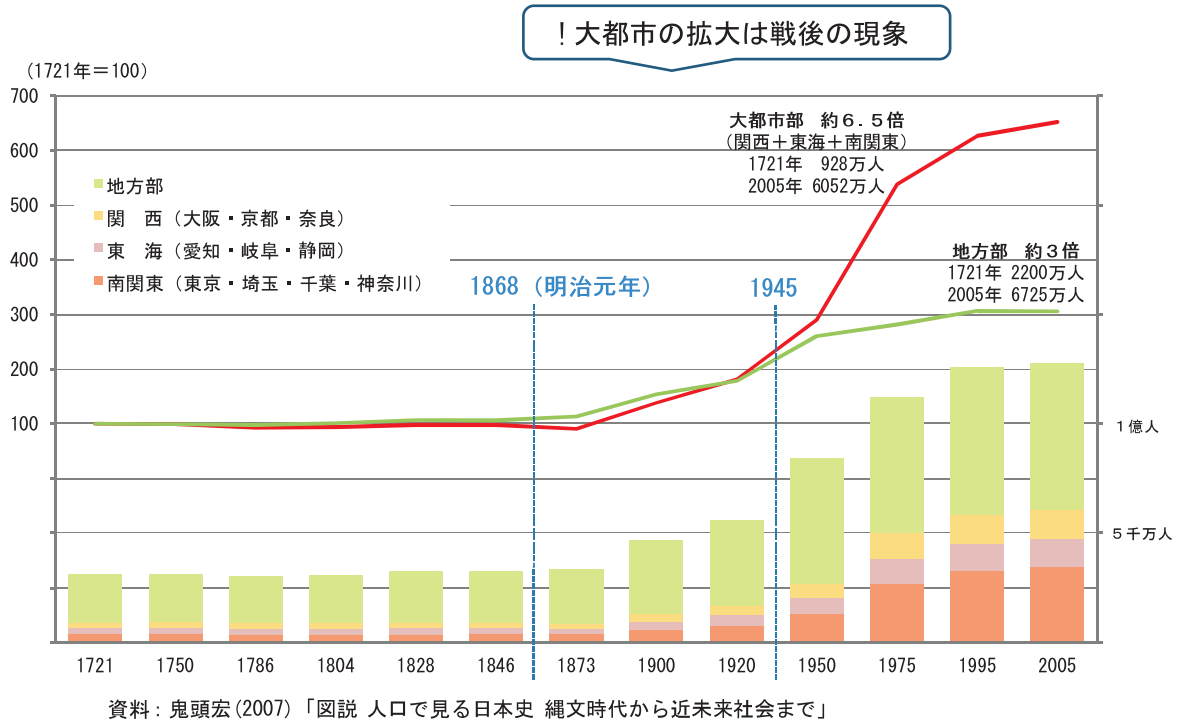
このように、東京と島根の間には、大きな格差があります。では、この格差はずっと昔からあったのかというと、実はそうではないのです。

日本は、明治の開国以降、西欧の進んだ技術や文明が入ってきて、近代化、都市化が始まりましたが、本格的な大都市集中が始まったのは、実は戦後のことです。日本が、昭和30年代、40年代に高度成長を遂げていく過程でごく短期間に急速に進みました。

3大都市圏と言われる南関東（東京・埼玉・千葉・神奈川）、東海（愛知・岐阜・静岡）、関西（大阪・京都・奈良）への転入者が大きく増加するのは、1955年（昭和30年）から1975年（昭和50年）にかけてです。

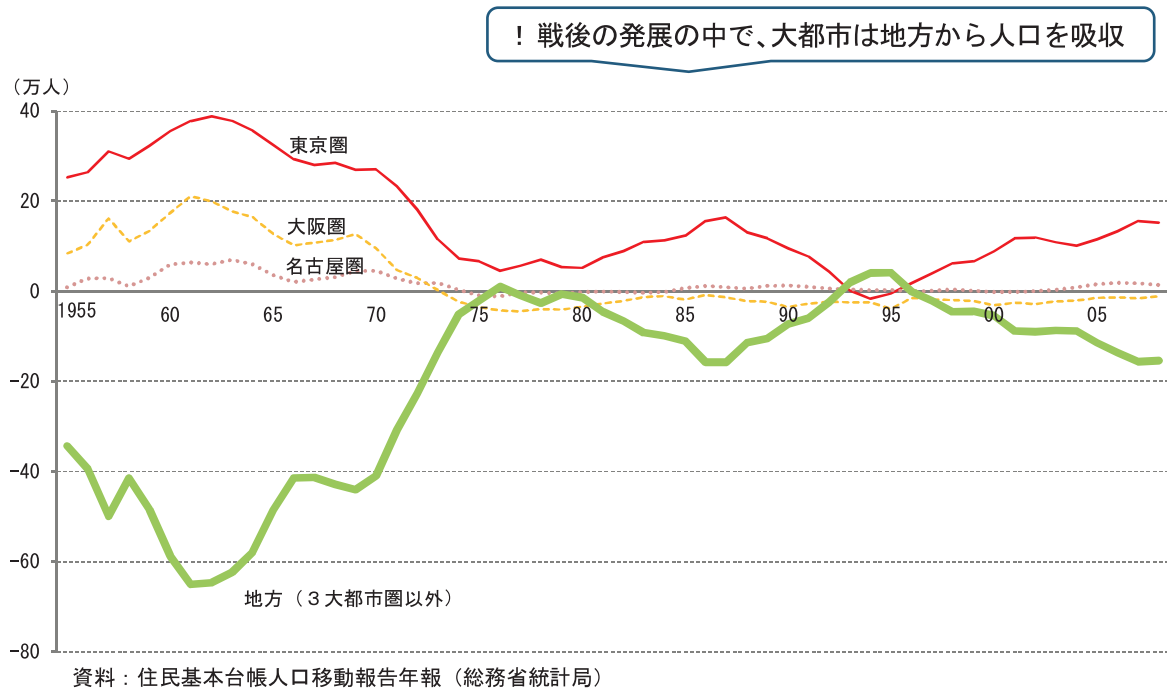
江戸時代からの人口の変化

図表 1



3大都市圏への転入超過数

図表 2



1950年代の朝鮮戦争やサンフランシスコ講和会議の頃から、戦後復興が本格化しました。高度経済成長が始まった1960年代からは、大都市部で工場の建設が顕著に進み、それに伴って東京などの大都市圏が急速に形成されてきました。

1970年代に入ると石油危機などにより成長が鈍化し、企業の設備投資は減少しました。そのため、大都市でも新規雇用が頭打ちになり、地方から大都市に出て行こうにも働き先が増えず、都市への転入がスローダウンしてきました。その後の大都市への流入はさほど大きくはなく、景気の動向に大きく左右されています。現在、大都市の人口吸収・雇用創出力は停滞傾向にあります。

県別の人口は、自然増減と社会増減の二つの要因で変動します。自然増減とは、子供が生まれる数と亡くなる人の数の差による増減です。生まれる数の方が死亡者の数より少なくなれば、人口は減少します。また、当該県への転入とそこからの転出を要因とする増減は社会増減といいます。

島根県で自然減が起こるのが1991年（平成3年）頃からで、だいたい年に2,000～3,000人程度、減ってきています。自然増減は人口の年齢構成に左右されるため、短期的には大きく変動しません。そのためいろいろな対策を打ってもすぐには効果はでてこないものです。

しかし、社会増減については、産業の発展などにより雇用が増えれば、比較的、短期間で人口を増やすことができます。

他方、日本全体で見れば、日本の国境をまたぐ社会増減は大きくないので、人口の増減は自然増減でほぼ決まってきます。日本人の平均寿命は延びていて、死亡者数は短期間には大きく変わりませんが、出生数や出生率は近年下がっていて、これが日本の人口減少をもたらしています。この問題は後で、大都市化の問題として取り上げます。

それでは次に、長いスパンで、県別人口の動きを見てみましょう。

2005年（平成17年）の日本全国の総人口は1億2,777万人です。鳥取県が61万人で一番少なく、島根県はその次に少なく74万人。相対的に見て、日本海側の発展が遅れ、人口も少なくなっています。また、東京都の人口が抜きん出て大きくなっています。

しかし、明治の始めの頃、例えば、1880年（明治13年）の人口を見ると状況は違っています。

当時は、鳥取と島根は1つの県で、人口は104万人でした。東京都の行政区画も今とは異なり小さかったのですが、人口は96万人で、鳥取・島根の合計の方が人口が多かったのです。それが今では、1,200万人を超えています。

神奈川県は、明治13年の人口は76万人で平成17年は879万人、愛知県は明治13年に130万で、平成17年は725万人、京都府は明治13年に82万人で、平成17年は265万人。こうしたところでは大都市化が進みました。

明治13年の新潟県の人口は155万人で、平成17年は243万人ですが、おそらく当時は新潟県がもっとも人口が多い県だったと思います。商品経済も近代的工業も未成熟で農業が主要産業だった時代には、経済活動は自給自足の地域単位の中でほぼ収まります。当時、農業が盛んだった新潟県の人口は多かったのでしょう。

このように人口の増加、都市化は産業の発展と大きく関係しています。重要なことは、この産業の発展は、天然自然に起こるのではなく、国の政策に大きく左右されるということです。

古代から近世にかけて、奈良、京都、大阪などの関西が早く発展したのは、そこに政治の中心、即ち朝廷や幕府が置かれて人が集まり、全国の物資や文化の交流の中心となったからです。つまり、都市化が進む背景には国の大きな政策があるのです。

都道府県人口の推移

図表 3

(単位：万人)

	明治13年 (1880)	21年 (1888)	41年 (1908)	大正14年 (1925)	昭和20年 (1945)	40年 (1965)	60年 (1985)	平成17年 (2005)
秋 田	62	68	87	94	121	128	125	115
山 形	68	74	89	103	133	126	126	122
新 潟	155	166	177	185	239	240	248	243
富 山		75	75	75	95	103	112	111
石 川	183	74	75	75	89	98	115	117
福 井		59	61	60	72	75	82	82
鳥 取		39	43	47	56	58	62	61
島 根	104	69	72	72	86	82	79	74
全 国	3,593	3,963	4,932	5,974	7,200	9,827	12,105	12,777
東 京	96	135	268	449	349	1,087	1,183	1,258
神 奈 川	76	92	109	142	187	443	743	879
愛 知	130	144	179	232	286	480	646	725
京 都	82	87	110	141	160	210	259	265
大 阪	108	124	195	306	280	666	867	882
兵 庫	139	151	189	245	282	431	528	559
福 岡	110	121	164	230	275	396	472	505

資料：明治13年「日本帝国統計年鑑(統計院)」、明治21年以降「日本の長期時系列統計(総務省統計局)」

東京が大都市になっていったのも、江戸に幕府が置かれてからです。さらに明治政府のもとで日本の近代化、西欧化のリーダー役を担ってきました。そして戦後復興では、東京は産業発展の中心となりました。

高度成長期のような急速な産業発展が進むためには、多くの人が住めるような都市空間が必要です。そこには住宅、道路、下水道、学校、病院などの公共インフラが必要となり、集中的に整備を進めなければなりません。最初はそうした政策があって都市化が進みます。それが一定程度進むと、企業や人がさらに集まる、集まると税収も上がってさらに公共投資が行える、そして国もそれを支援するという、言わば都市化が自動的なプロセスとして進むこととなります。

東京などは、幕府が江戸に置かれてから戦後の京葉地区の重化学工業化まで、幕府と政府の政策として東京湾が埋立てられ、用地が確保されてきました。大阪湾にも伊勢湾にも似たような歴史があります。

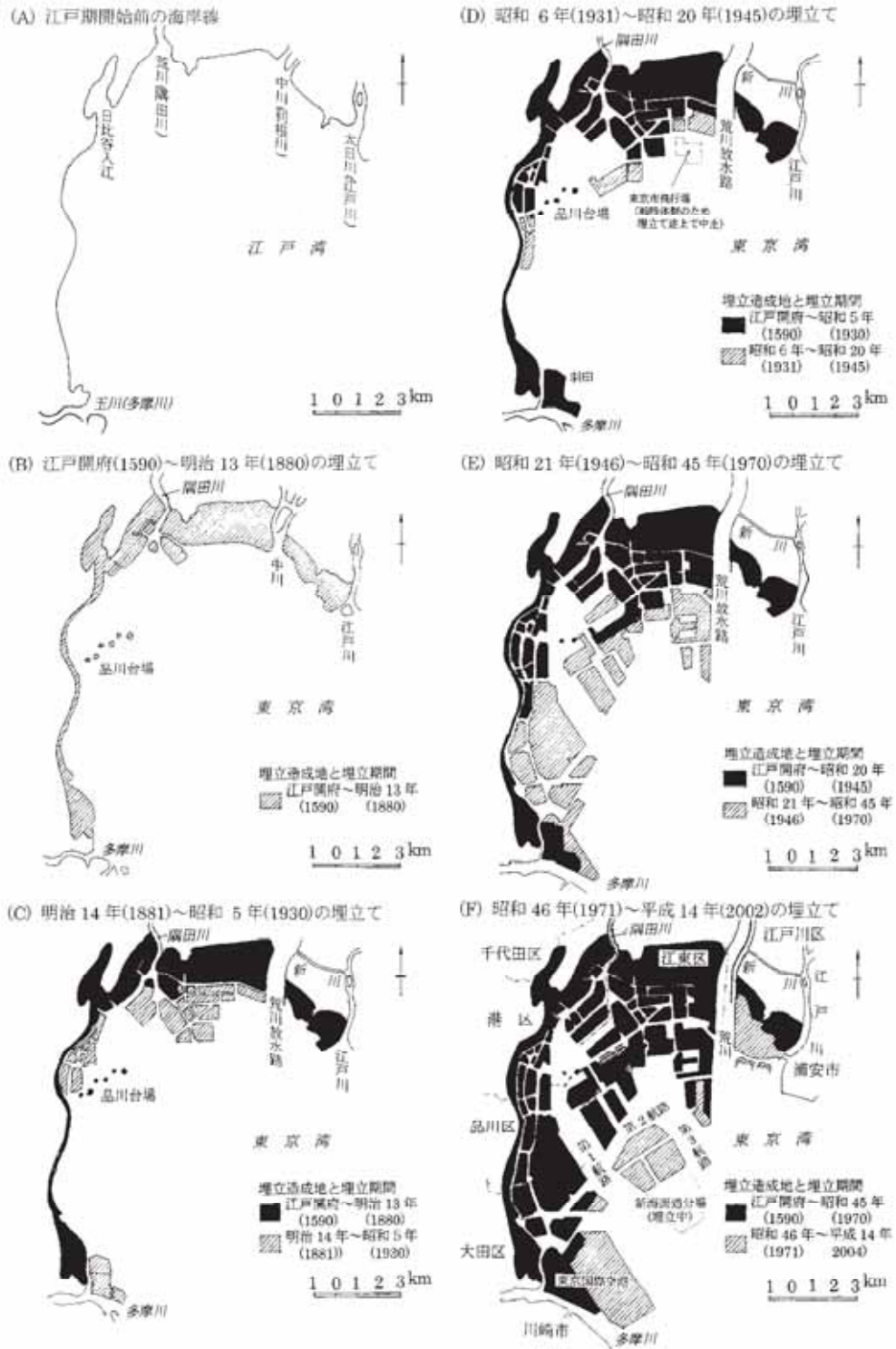


図 10 東京臨海部における江戸期開始の天正 18 年 (1590) から平成 14 年 (2002) までの埋立地分布の変遷。

資料：

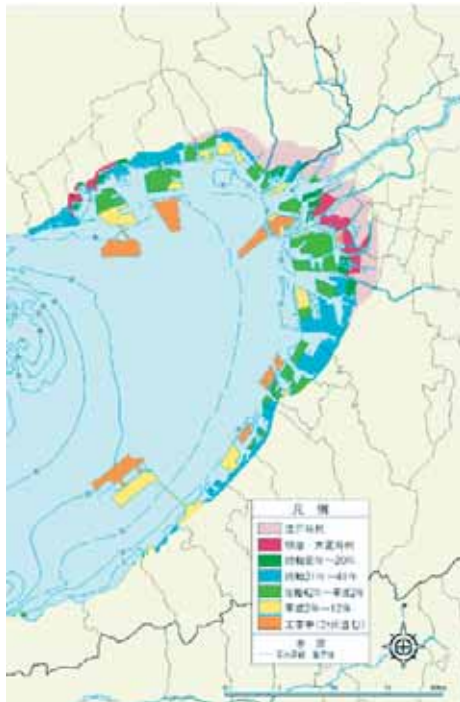
誌名：地学雑誌
著者名：遠藤 毅 氏

出版年：2004年 113 (6) 785-801
表題：東京都臨海域における埋立地造成の歴史

大阪湾、伊勢湾の埋立

図表 5

大阪湾の埋立



伊勢湾の埋立



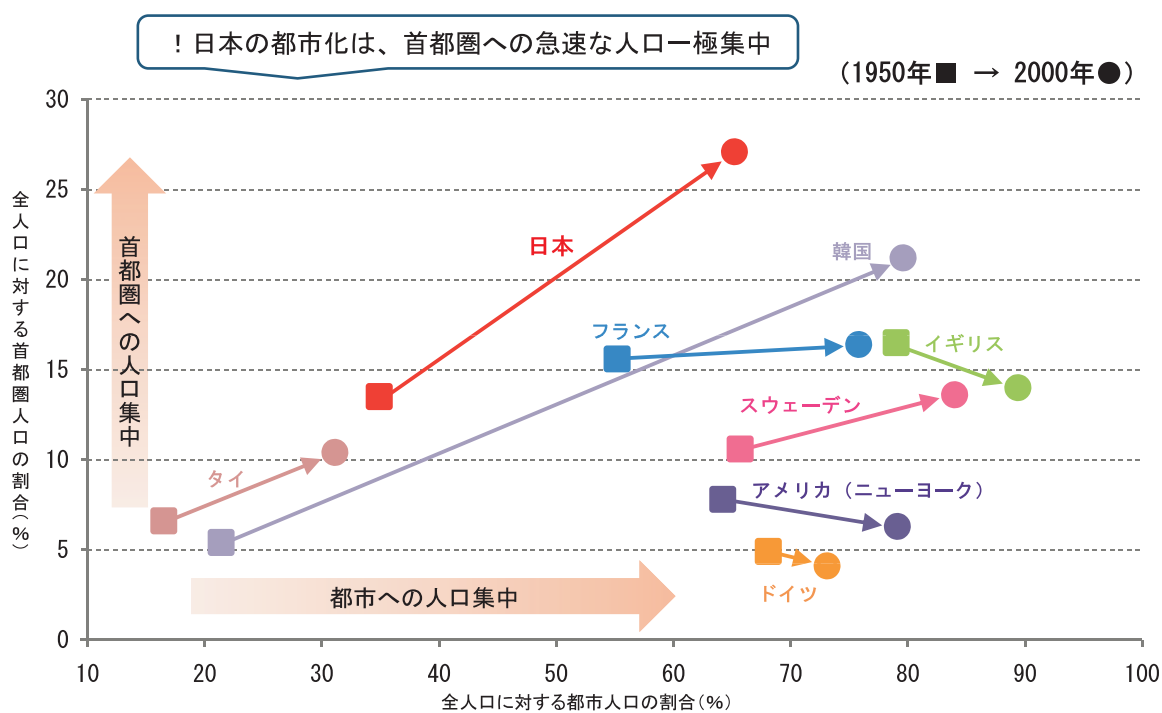
資料：国土交通省近畿地方整備局HP
国土交通省中部地方整備局「伊勢湾環境データベース」
「平成19年版首都圏白書(国土交通省)」

次に、戦後の日本の大都市化は、諸外国と比べてどうだったのでしょうか。1950年（昭和25年）から2000年（平成12年）までの、国全体の都市化と全人口に対する首都圏への集中度合いを国際比較してみましょう。

日本では、1950年の都市人口は全人口の30%強で、うち首都圏人口は15%弱でしたが、2000年には、都市人口は70%程度となり、うち首都圏人口は25%強となって、東京一局集中が進みました。

主要国の都市化の動き

図表 6



資料：国際連合「World Urbanization Prospects : The 2007 Revision Population Database」

一国の発展をリードする首都がこのように巨大化していく動きは、後発国が先進国にキャッチ・アップする際に一般的に起こるプロセスであり、最近ではアジアで、特にタイ、韓国、中国などでその傾向がよく見られます。中国は大きい国ですから、北京以外にも、上海、大連、重慶などの大都市がいくつもあり、そのいずれでもこうした傾向が現れています。

一方欧米などでは、この期間中、大都市化も首都圏集中もほとんど進んでいません。むしろ、後退した国もあります。欧米の先進国の経済社会の成熟化と関係していると思われる。

第二章 国の政策で進んだ大都市化

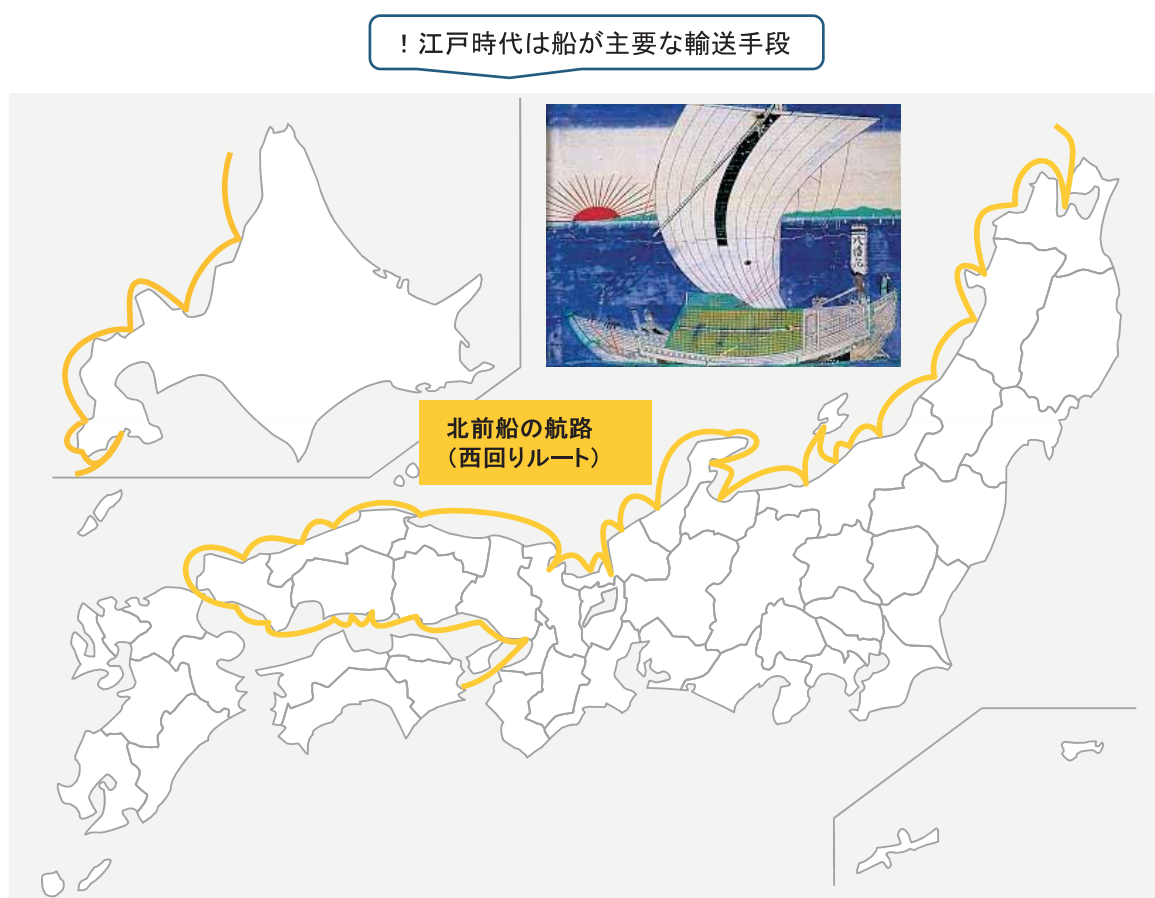
それでは次に、国の政策と都市化の関係を歴史的に見てみましょう。

人は自分一人だけでは生活できません。物資や食料の調達、各種施設の整備など公共部門の活動が不可欠です。その中で特に大きい役割を果たしているのは交通です。

交通の整備は国の政策だけではなく、その時々々の技術水準の影響も受けます。

北前船の航路

図表 7

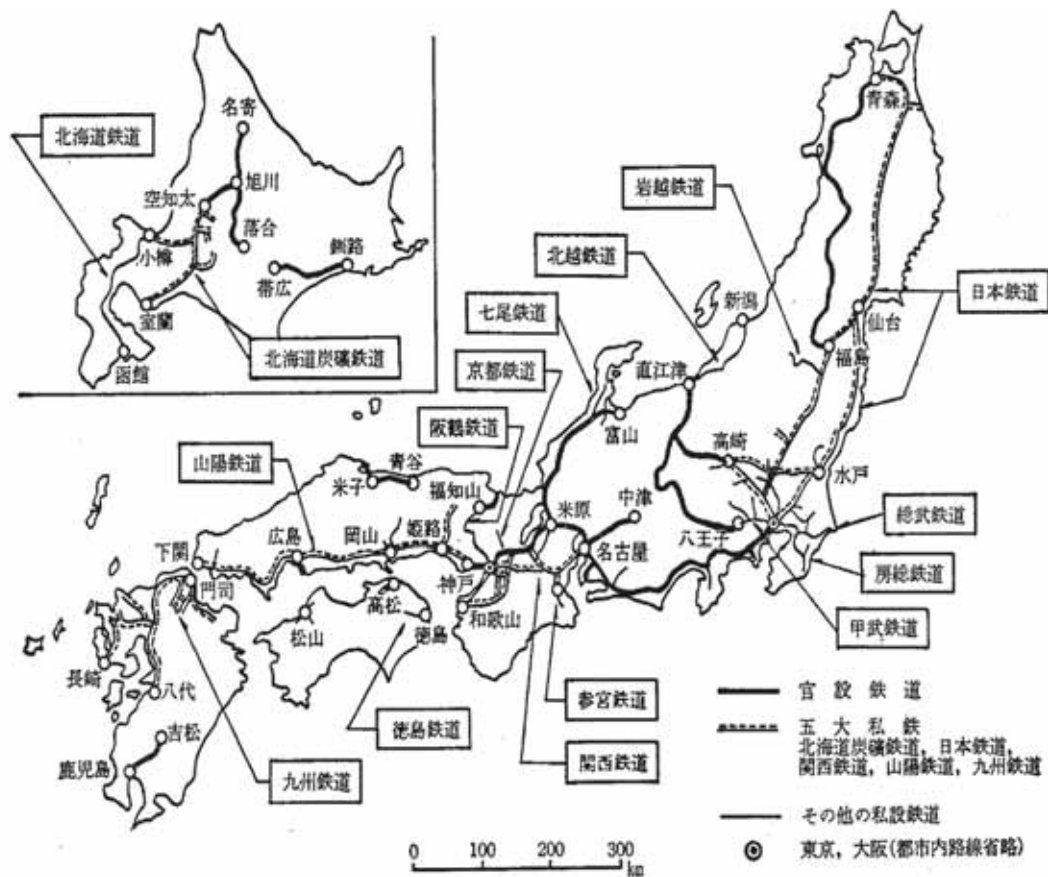


江戸時代は、人口の移動もさほど大きくなく、大都市の江戸や大坂へ、大きく重い物資を運ぶときには船が利用されていました。日本海側の北前船が有名ですが、明治に入ってからは鉄道の整備が進み、海路の役割は次第に小さくなります。

明治になって、鉄道の整備が進むと、駅を中心に町が発展し市街地が形成されました。鉄道は、太平洋側の東海道から西へと整備が続けられました。

明治になり太平洋側から整備された鉄道網

図表 8



第2図 鉄道国有化直前(1906(明治39)年9月)の鉄道網。

資料：

誌名：交通・運輸の発達と技術革新：歴史的考察

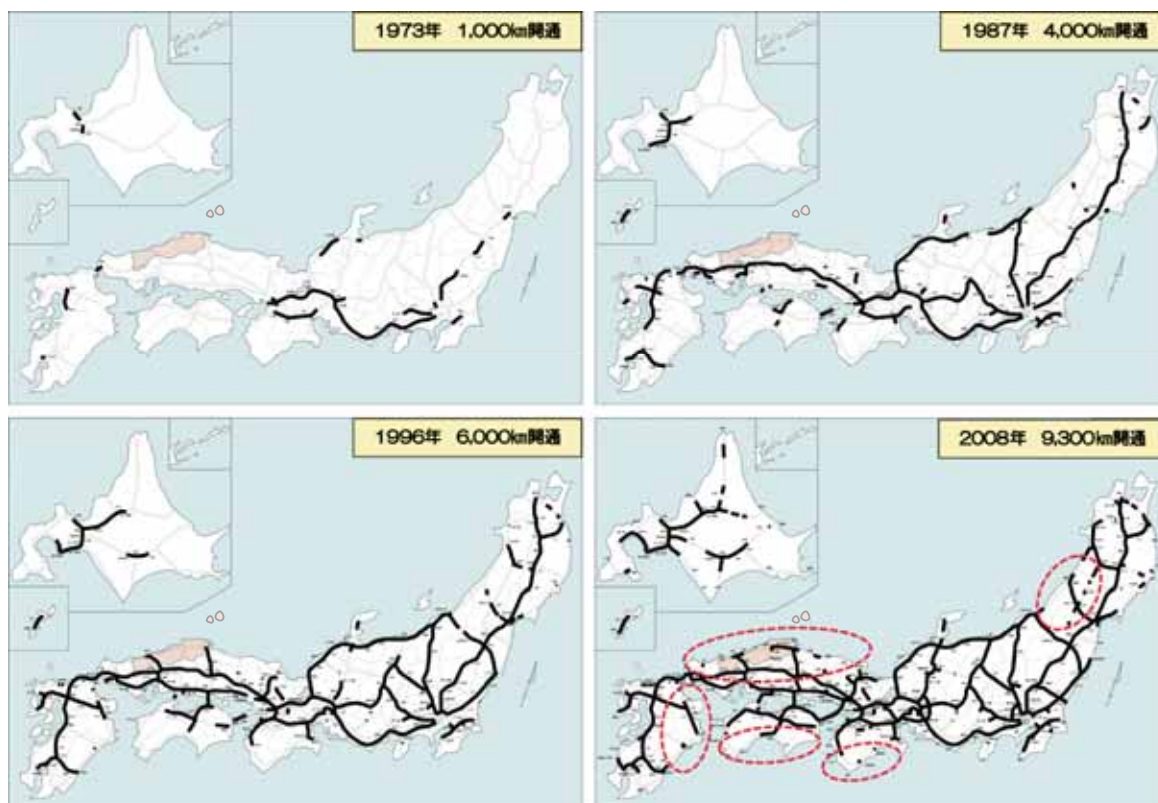
第3章：鉄道優先時代の交通・運輸—1892～1909（明治25～42）年II 鉄道から

著者：原田 勝正 出版社：国際連合大学 出版年1986年

戦後は、モータリゼーションが進み高速道路の役割が大きくなっています。まず最初に、東京と関西の間で、東名高速道路や名神高速道路などが整備されました。

戦後、太平洋側の大都市周辺から整備された高速道

図表 9



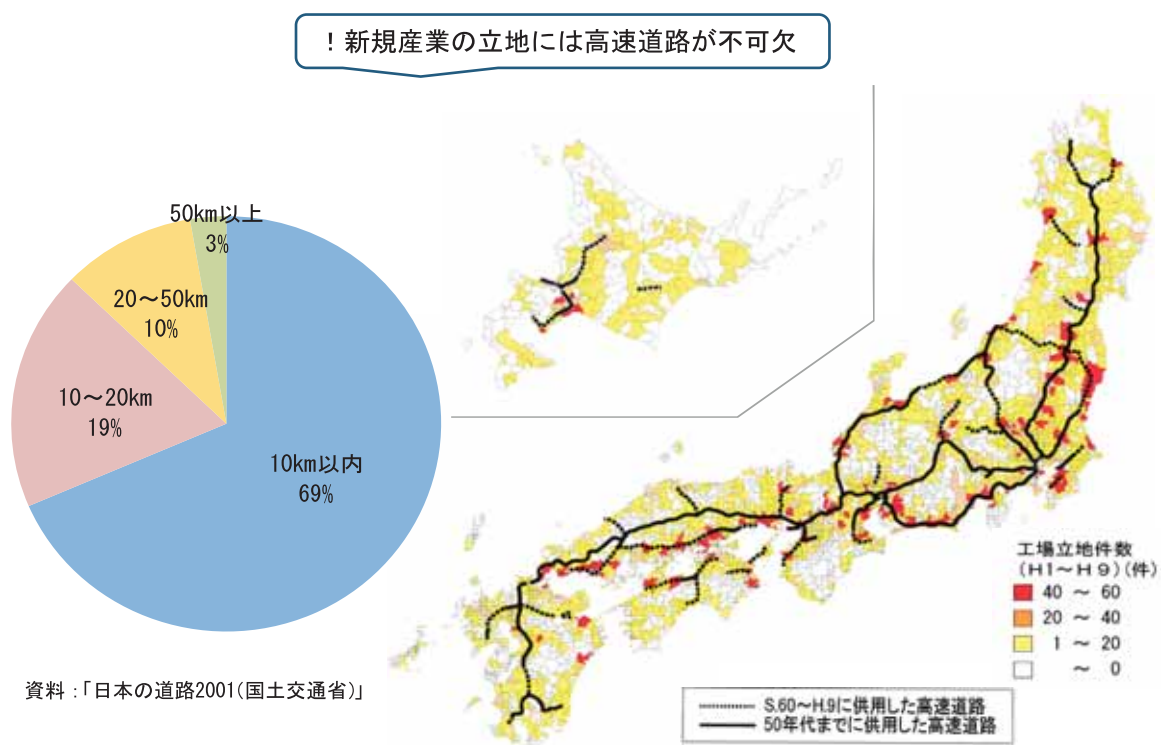
1964年（昭和39年）に東京オリンピックが開催されます。日本は、戦後の荒廃から立ち上がり、世界から一人前の国家として認められる段階になったわけですが、このときに東京に来る外国人に日本の復興の様子をよく見てもらえるよう、首都圏を中心に急速に交通インフラの整備が進められました。

その後、全国的にも高速道路整備が進み、2008年には総延長は9,300kmに達しています。しかし、今でもなお、島根県をはじめ、山形県、和歌山県、鳥取県、宮崎県などに高速道路未整備地帯（いわゆるミッシング・リンク）が存在しています。

現代の自動車社会において、高規格道路の整備は必須です。特に産業の世界では、企業は在庫を多く抱えず、ジャスト・イン・タイムの搬送による在庫管理を行っています。そのため、安全・確実な道路交通の手段を確保することが不可欠となります。例えば、自動車部品を作っている企業などは、輸送手段が安全に確保されているかどうか立地の必須の要件になっています。

インターチェンジからの距離別工業立地件数(H10年)・
高速道路整備と工業立地の関係

図表10



このため、企業立地の際には、高速道路のインターチェンジから近いことが重要であり、国土交通省の平成10年の調査によれば、インターチェンジから10km圏内に工場を建設している割合は全体の69%にもものぼっています。高速道路のネットワークから外れているということは、地域の自立にとって不利な立場に置かれているということを意味します。

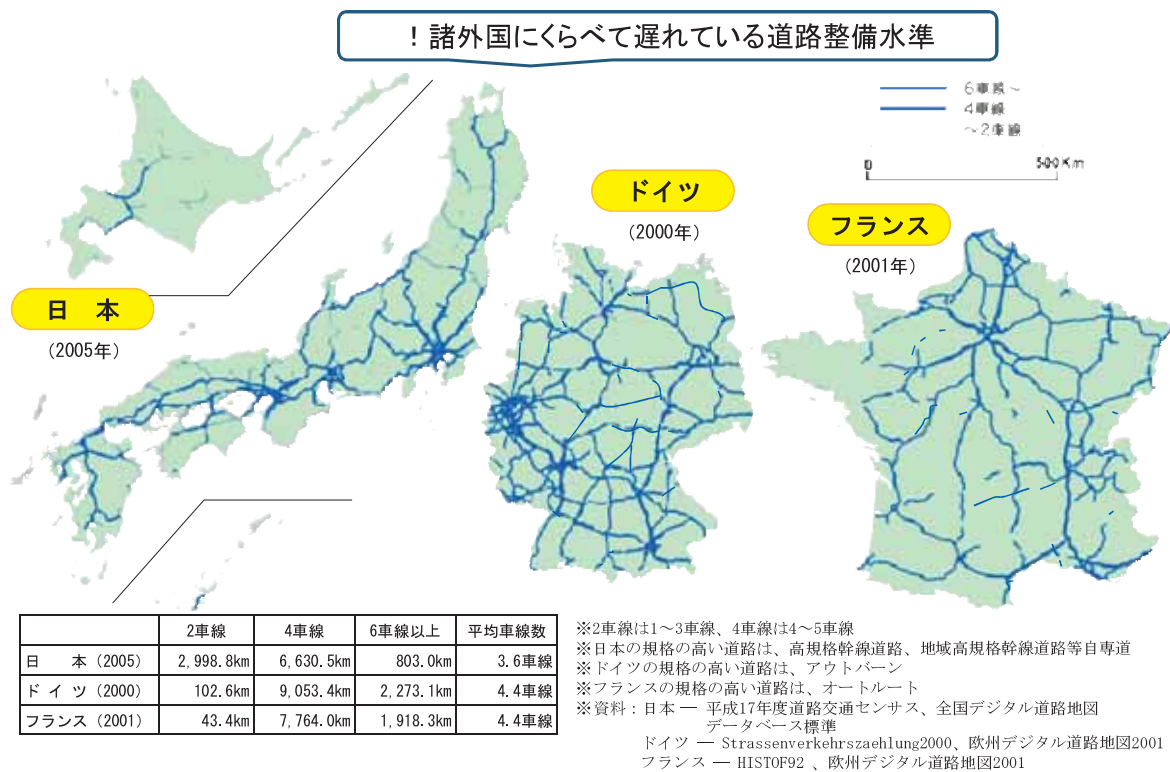
この観点から私は、遅れている地方の高速道路網の整備をもっと早く行って欲しいと考えています。「コンクリートから人へ」の政策は、経済社会の

成熟化に伴う一つの考え方だと思います。しかし、大都市では「コンクリート」は必要なくなっても、「コンクリート」がまだ不十分であるために経済発展が遅れ、あるいは大雨で土砂崩れや水害などが起こり、人々の安全、安心が脅かされている地域がまだ残っているということを忘れないでくださいというのが、私の主張であります。

道路をはじめとする公共インフラは、都市部から地方へと順番に整備されてきて、今、やっと地方に順番が回ってきそうになったところでした。これからようやく地方の整備を進めようという段階に入ったところで、それをさらに遅らせるのは不公平だというのが私どもの考えです。政治が目指す根本目標は公平の確保でなくてはなりません。

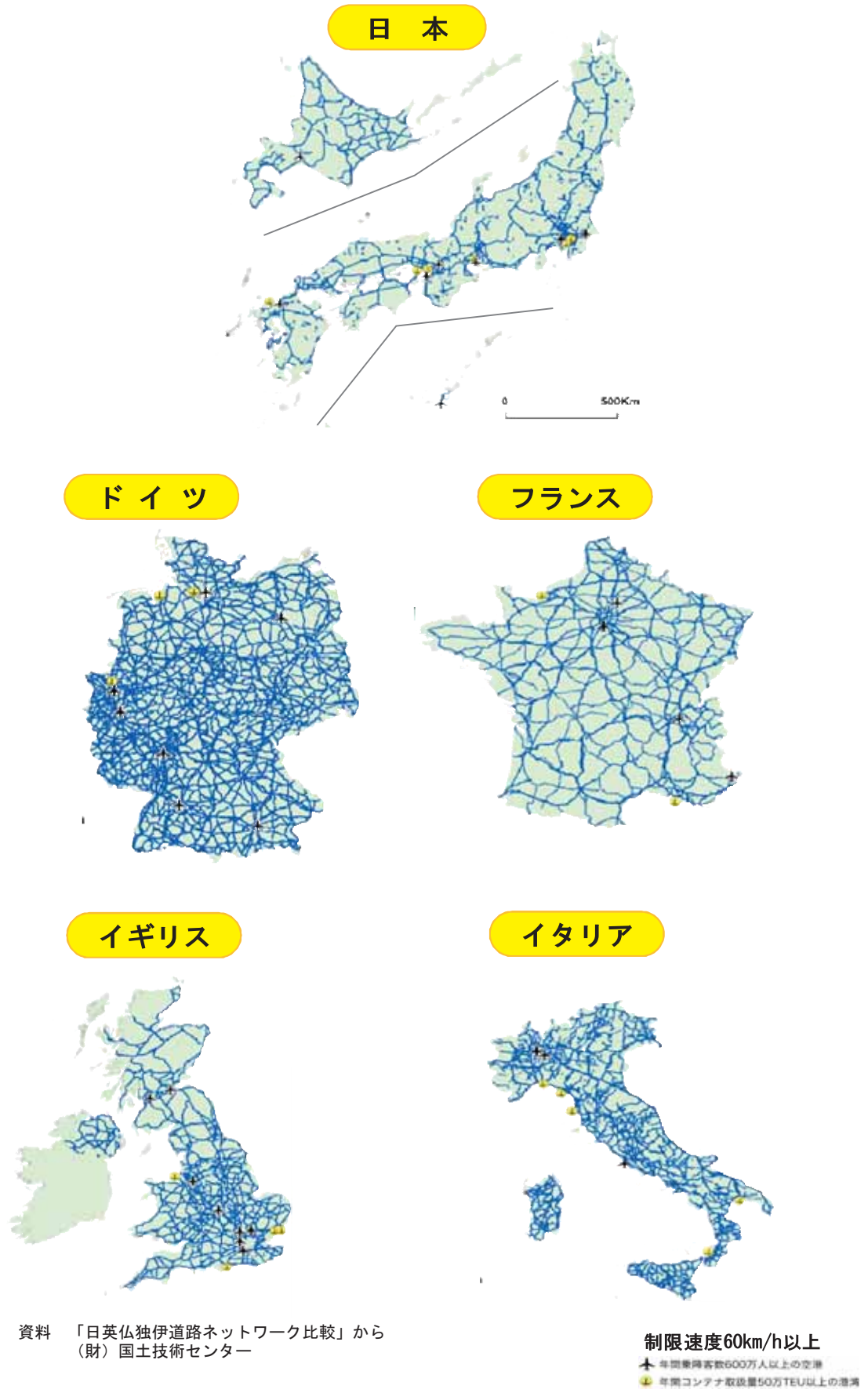
高速道路などの車線別延長（諸外国との比較）

図表11



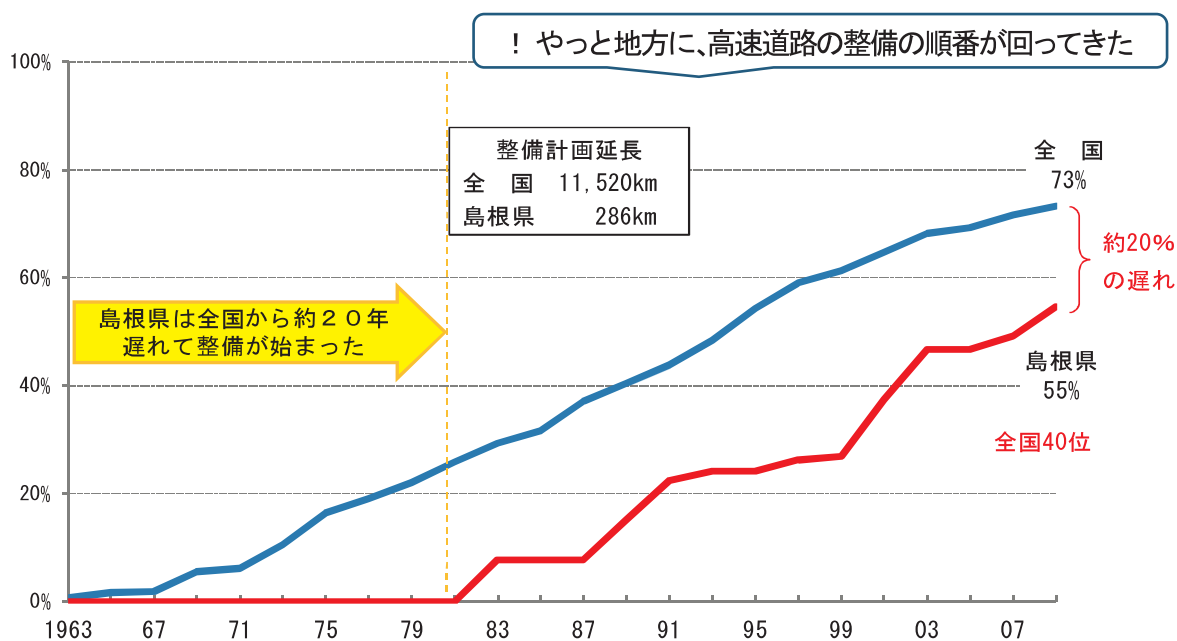
次に、欧米と道路整備の水準を比較してみますと、日本はかなり遅れています。ドイツやフランスなどと比較するとその差は歴然としています。日本の道路整備は、まだネットワークの形成にまで至っていません。それは、日本では山あり谷ありという不利な地形条件の下で、高コストで道路整備を進めていかざるを得ないからです。例えば、人口も面積も日本と近いドイツやフランスなどは平地が多く、制限速度が60キロ以上の道路が網の目のように整備されています。そこには巨大都市はあまりなく、国土全体に豊かな田園が広がっています。

私は欧州のような、豊かで自立した中小都市群のネットワークで構成される国づくりを目指すべきだと思います。そのためには、自立した中小都市が存在しうるような条件整備が必要なのです。こうした観点から、地方の社会インフラ整備の状況を見ますと、遅れているのは道路だけではないのです。



高速道路の供用率

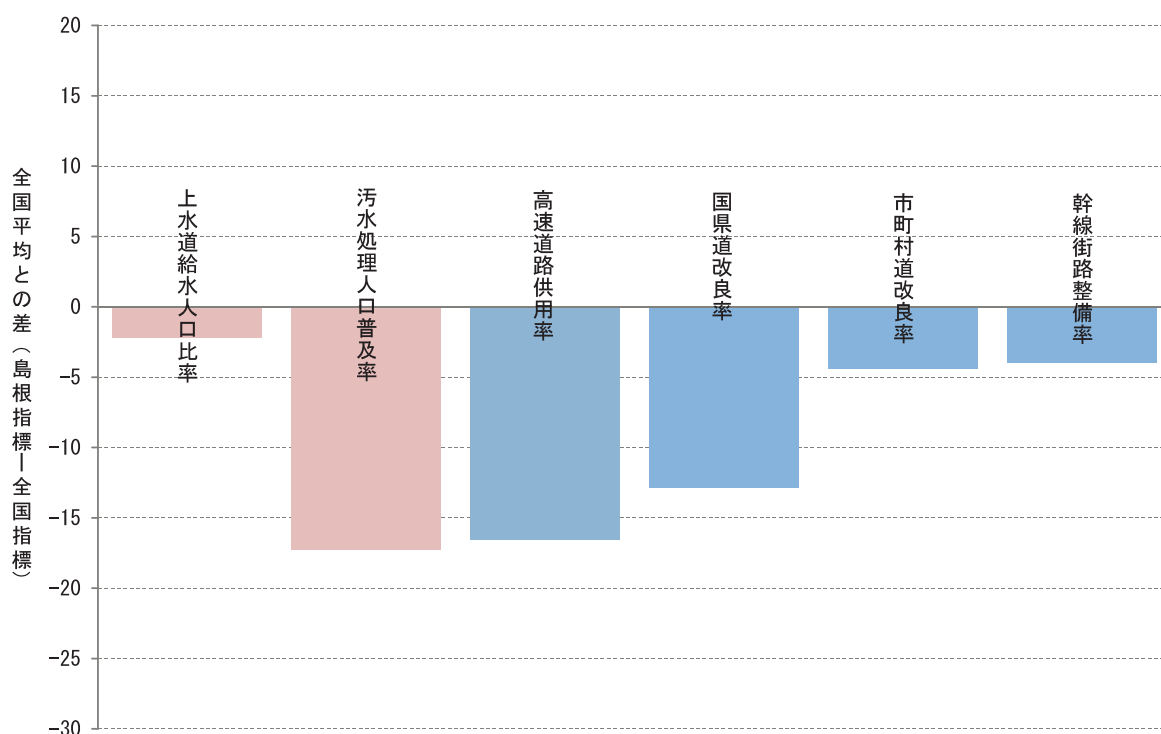
図表13



島根県の高速道路の供用率は55%で、全国平均と比較すると20%も下回っていますが、下水道などの整備率も軒並み全国平均を下回っています。基礎的なインフラは、全国どこの県でも一定程度は整備され、国民全体に対して公平な環境を整えることが必要だと考えます。

生活基盤の整備格差 (島根県と全国平均の差)

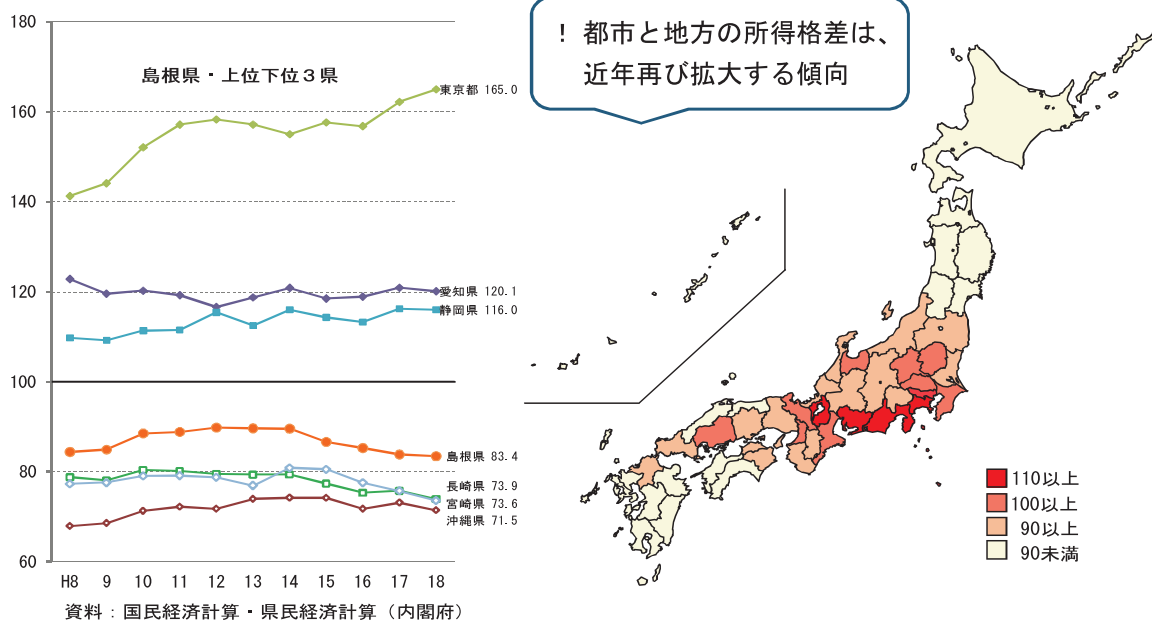
図表14



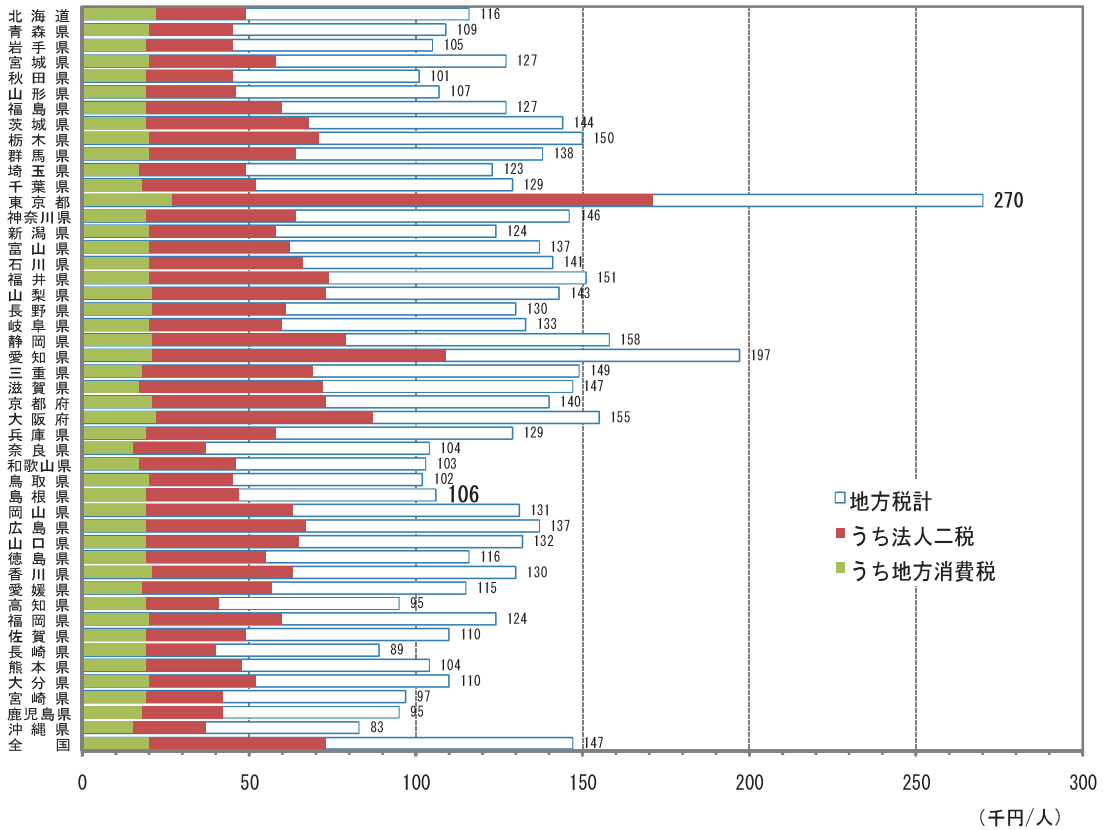
こうしたインフラ整備の遅れ、産業発展の遅れは、1人あたりの県民所得にも表れ、全国平均を100として、東京都の165に対して島根県は83です。経済活動の差がありますから、企業所得にも差が生じ、その影響を受けて法人事業税など法人関係税にも差が出てきます。

1人当たり県民所得（全国平均を100とした指数）

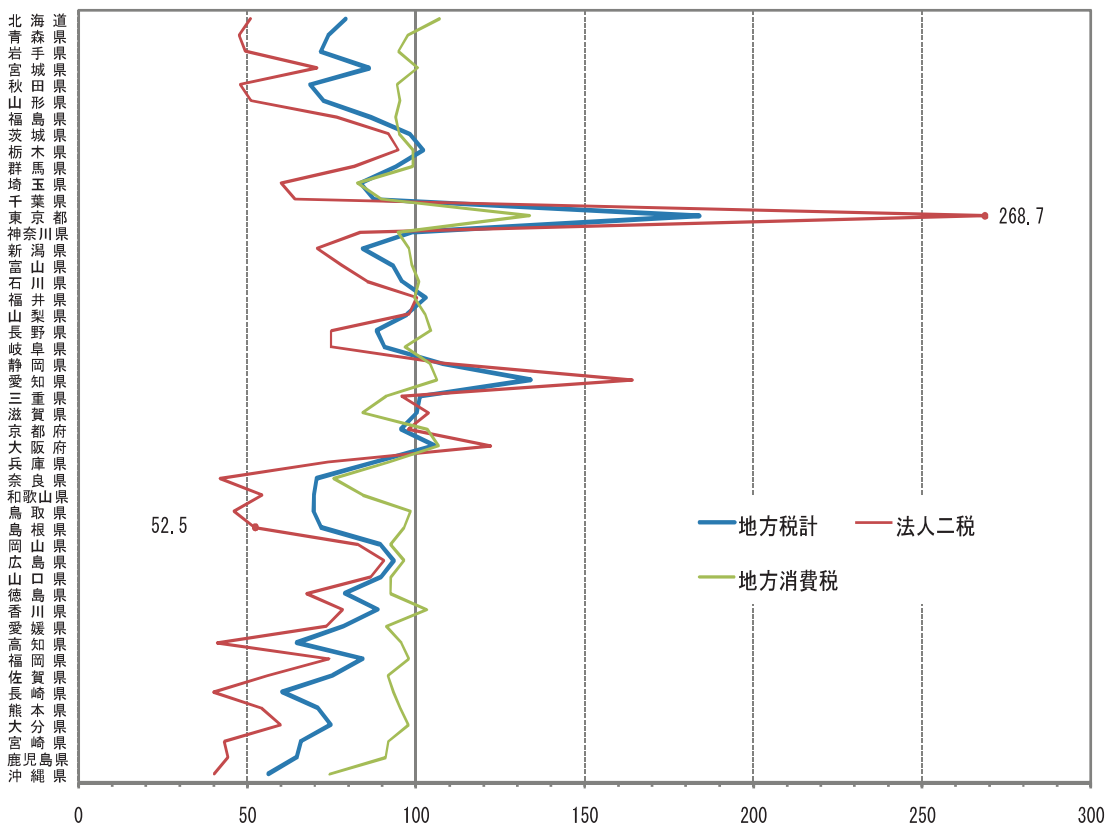
図表15



人口1人当たり都道府県税込



全国平均を100とした指数



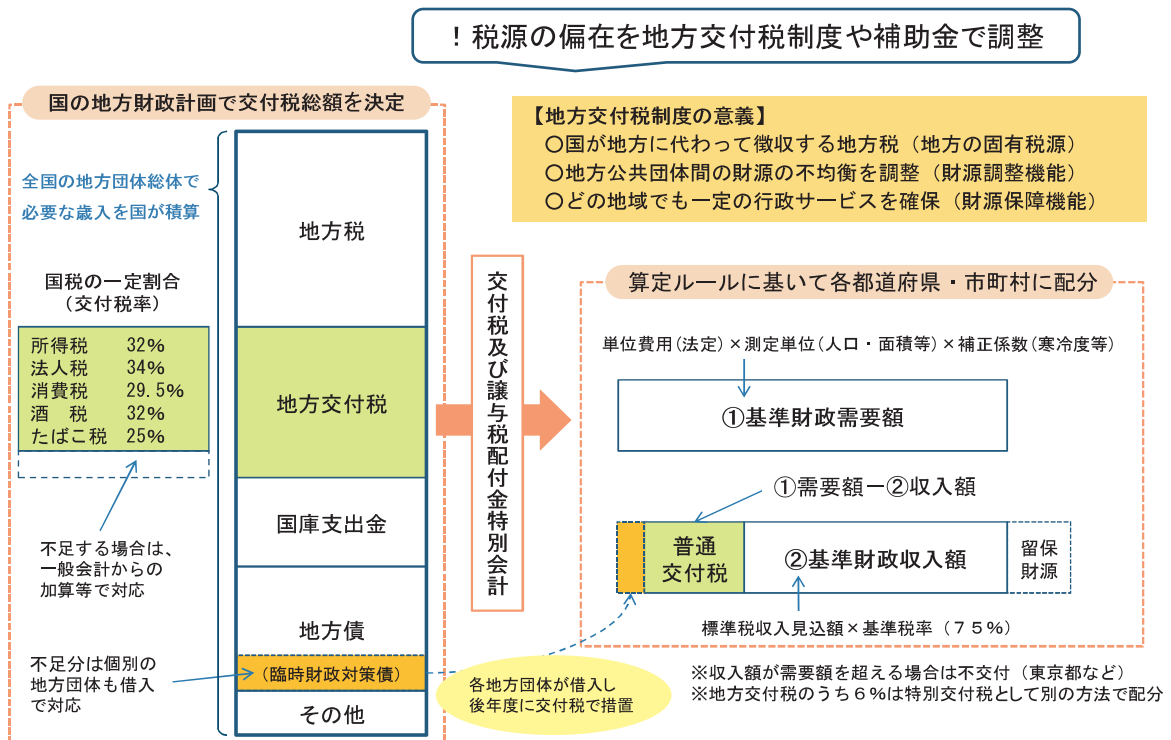
資料：H19年度 決算統計（総務省）

そうした格差を埋める手段の一つが国の補助金または負担金です。例えば、全国の小中学校の義務教育費には、国の負担金が充てられています。国が一定の負担をすることで、国全体の教育のレベルを維持し、必要な行政水準を保つためです。合理的な理由がなく効果が期待できない補助金は整理すべきだと考えますが、教育や福祉、公共インフラなど基礎的な行政サービスを、全国どこでも一定水準で確保するためには、税収が少ない地域とのバランスを図る上で補助金・負担金は大切です。

格差を埋めるためのもう一つの手段は、地方交付税です。国税の一部を地方交付税交付金として地方自治体に交付し、必要な行政サービスが行えるようにするとともに、大都市と地方の財政力の格差を調整しています。日本は山あり川ありの国土であることから、地域によって投資効率が大きく異なり、経済発展の格差が生じやすいため、その格差を調整するためにこうした財政調整制度が広範囲にとられているのです。

地方交付税制度

図表17



このような大都市と地方のバランスを取るための財政制度は、部分的には戦前からありました。私は、こうした財政調整制度をさらに活用すべきだと考えます。

しかし、財政だけでは地域間格差の調整は行き届きません。財政調整機能だけでは解決できない多くの問題があります。例えば、地方において医師不足は深刻です。かつては、大学医学部の医局が人員の調整などを行ってきましたが、最近では、研修制度の変更に伴い病院での研修が必修になり、いろいろな症例の臨床・研究が出来る大都市の病院に若手の医師が集まり地方で不足するという問題が生じています。こうした問題に対しては、国が日本全体に関わる問題として対応する必要があります。

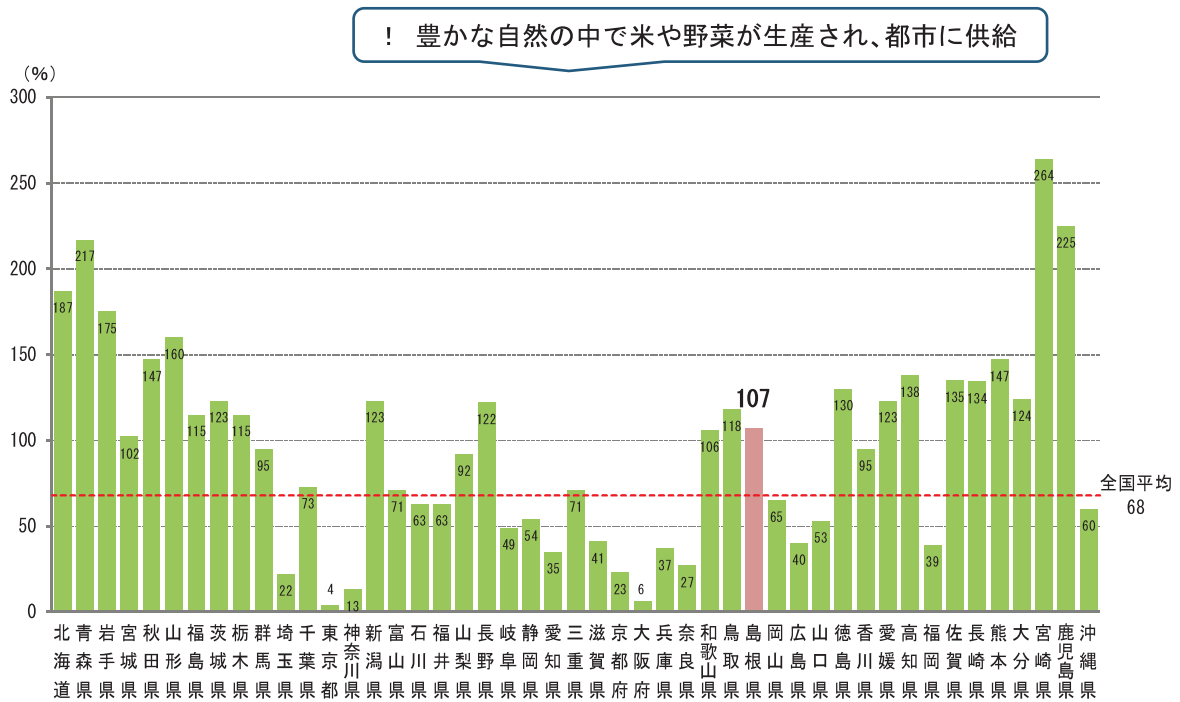
第三章 地方が果たす役割

では次に、なぜ、豊かな地方が必要なのかを考えてみましょう。そして、地方は国の中でどんな役割を果たしているのか、考えてみましょう。

地方には豊かな農林水産業があり、美味しいお米、安全で安心できる食材が豊富です。食料自給率の観点からみれば、地方が大都市部に新鮮で安全な食料を供給しています。

都道府県別食料自給率（H18年度 生産額ベース）

図表18

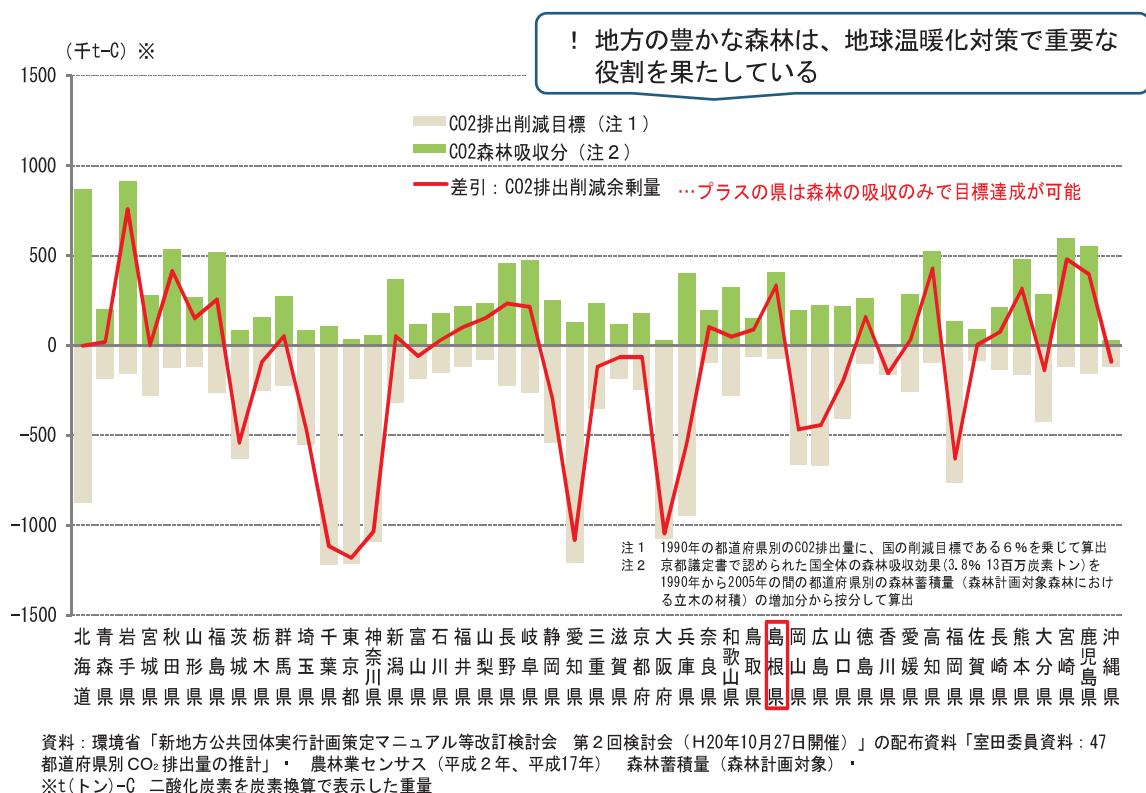


資料：H18都道府県別食料自給率（農林水産省）

また、地方の豊かな自然が、人々の生活、文化、安らぎのために必要なこととは言ってもありません。近年は、さらに地球温暖化防止の観点から地方の森林によるCO₂吸収効果が国策として極めて重要になっています。島根県のような地方ではCO₂の森林吸収分からCO₂削減目標を差し引きすると余剰が出ています。つまり、田舎の森が都市で排出されるCO₂を吸収しているのです。

CO₂排出削減目標と森林によるCO₂吸収効果

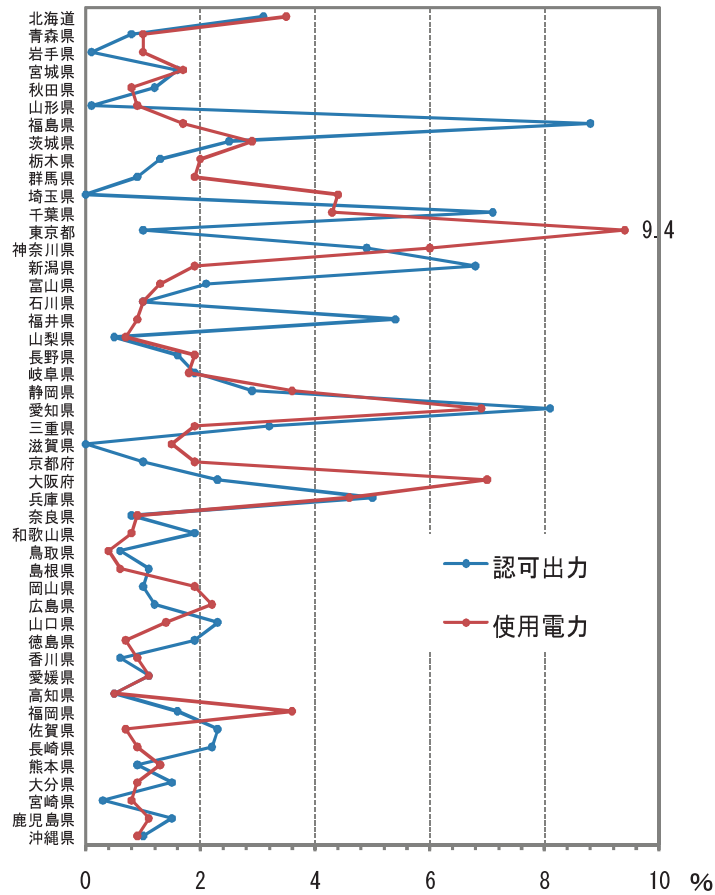
図表19



電力の場合は、地方で発電された電力が大都市に送電され、そこでの産業や生活を可能にしています。特に原子力発電などは、その顕著な例です。これからのエネルギー供給のために必要となる原子力発電所のほとんどは、地方に設置されているのです。島根県内で発電された電力も県外に送電されています。原子力発電の安全の絶対的な確保が大前提ではありますが、地方はこうした面からも大きな役割を担っているのです。

認可出力・使用電力量の全国シェア

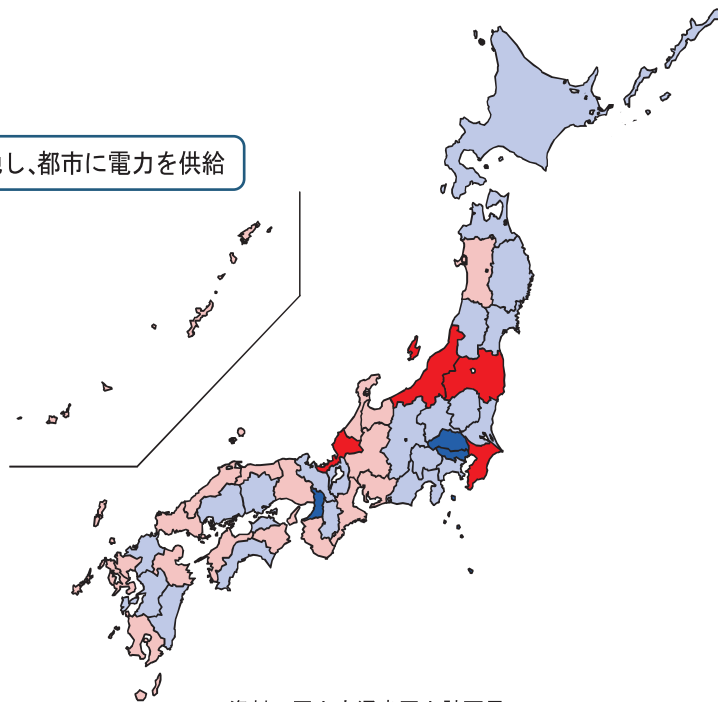
図表20



！発電所は主に地方に立地し、都市に電力を供給

認可出力シェア－使用電力シェア

- 2%以上
- 0～2%
- -2～0%
- -2%以下



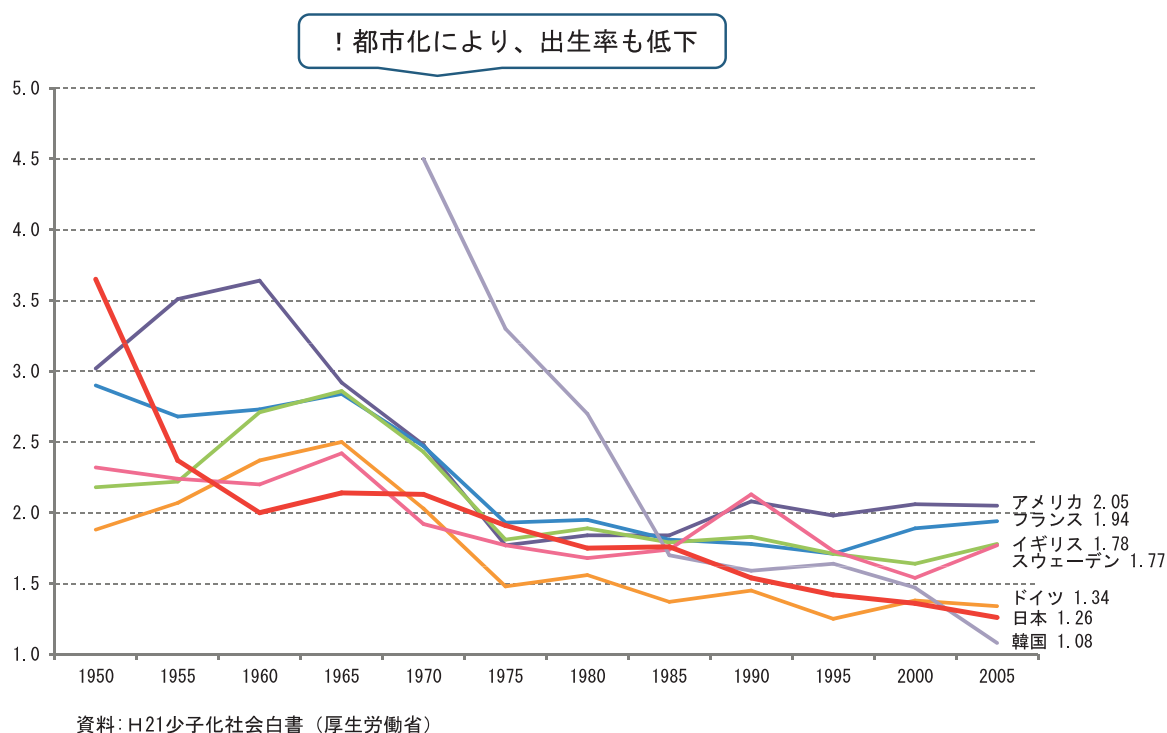
資料：国土交通省国土計画局

さらに、次世代人口を増やすという観点からみれば、子育て問題が存在しています。日本の合計特殊出生率^(注)は、かつては高かったのですが、都市化が進むにつれて次第に落ちてきています。これは日本に限らず、ほとんど、どこの国でも都市化に伴い同様にみられる現象です。先に述べたように大都市化が進む日本では少子高齢化が進み、将来の活力の低下が心配されています。

(注)合計特殊出生率とは、一人の女性が一生に産む子供の数を推計したもので、この数値が概ね2を超えると、人口はほぼ一定となり、2より低くなると人口は減少に向かう。

主要国の合計特殊出生率の推移

図表21

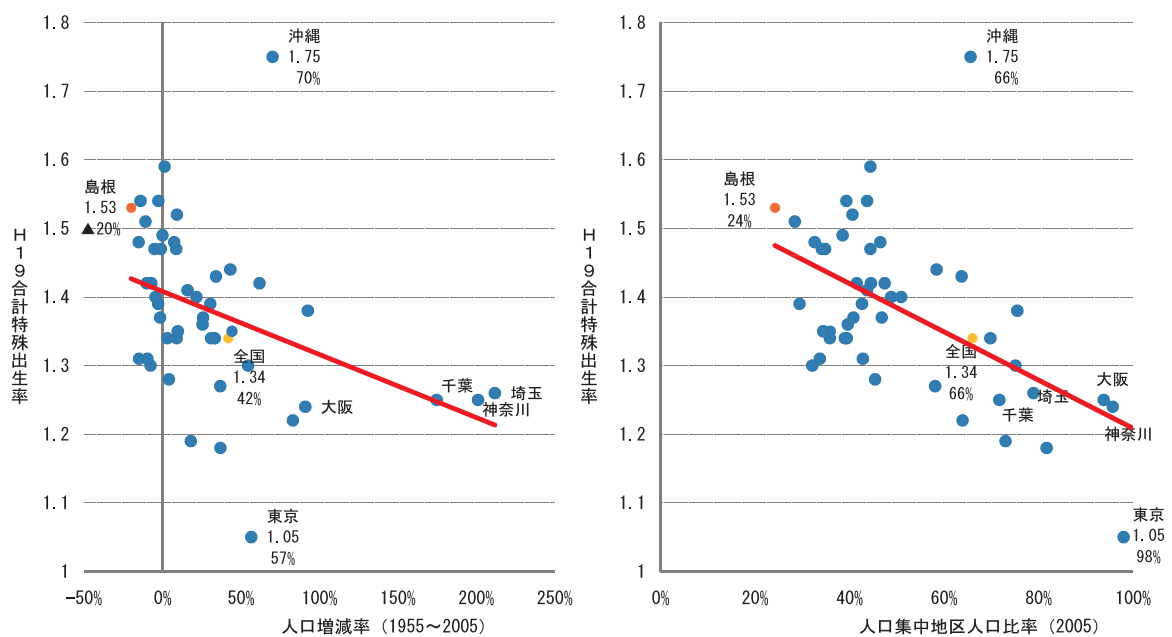


日本全体の少子化・人口減少問題の要因は、地方ではなく、実は、大都市で人口を再生産できなくなったことにあります。日本全体の出生率は近年1.26まで下がり、なかでも、東京は全国最低の1.00です。そうした中で、島根は1.50とまだ比較的高い水準を維持しています。このように地方部が高く、大都市で低いのは顕著な傾向です。

大都市は便利で刺激的でさまざまなチャンスがあり、若者を惹きつけますが、そこでの生活は決して楽しいばかりではありません。通勤は満員電車で時間もかかりますし、住居は狭く家賃も高い、共稼ぎをしても出費が大きく、子育てにも必ずしもいい環境とは言い難い。こうしたことが大都市部で出生率が下がる要因だと思います。

合計特殊出生率と人口増減率、人口集中地区人口比率

図表22



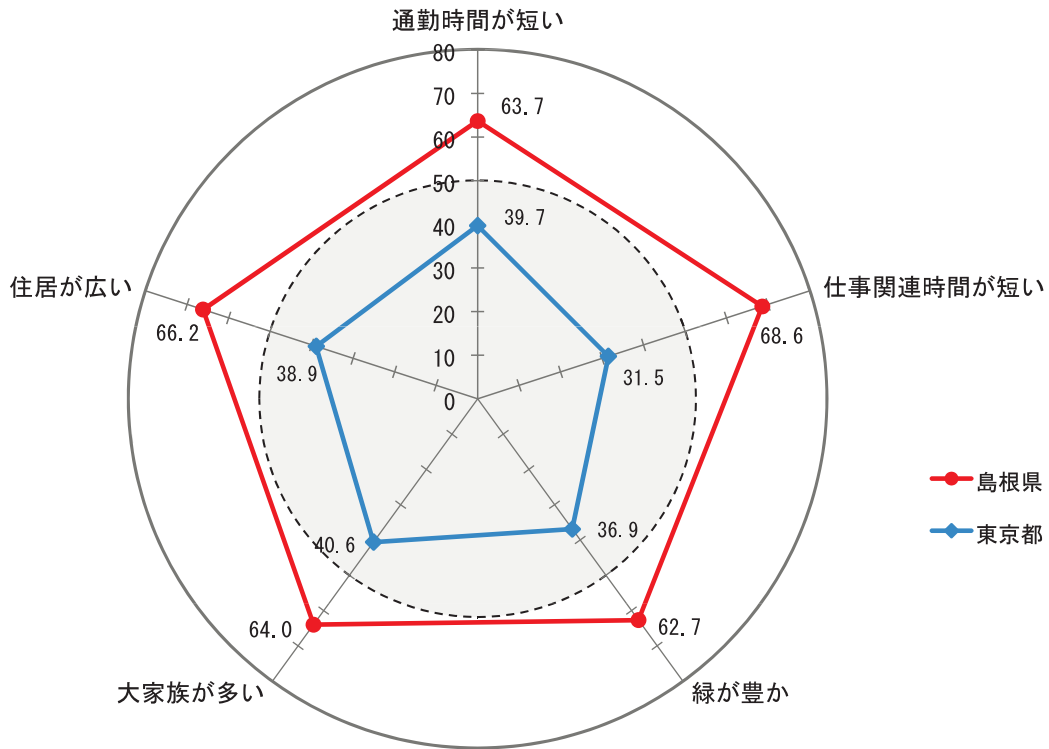
資料：人口統計資料集2009（厚生労働省）

一方、地方は一般的に職住近接で住居費も安く、自然が豊かで、生活と仕事のリズムが安定しています。そういう環境ですから、子育てもしやすい。地方の方が大都市より出生率が高いのはこうした条件のよさによるものだと思います。

つまり、日本全体としての出生率の低下は、生活がしにくく、子育てが難しい大都市に若者を集め過ぎたことにも大きな原因があるのです。大都市化を進めてきた国の政策が人口の再生産を困難にしていると言えるでしょう。この意味で、大都市化政策が歴史的に大きな曲がり角にきていると考えるべきだというのが私が特に強調したい点です。

子育て関連指標による比較

図表23



- 資料（偏差値）
- ・通勤時間が短い
H15住宅土地統計調査（総務省統計局）
 - ・仕事関連時間が短い
H19毎月勤労統計調査（厚生労働省）
 - ・緑が豊か（人口一人あたり都市公園面積）
統計でみる都道府県のすがた2009（総務省統計局）
 - ・大家族の割合が高い（三世同居率）
H17国勢調査報告書（総務省統計局）
 - ・住居が広い（人口一人当たり述べ住居面積）
H17国勢調査報告書（総務省統計局）

第四章 地方の発展と豊かな日本

こうした大都市化に伴う問題の解決を図るためには、政治の仕組みとして「分権（decentralization）」を進めることは必要です。しかし、もっと必要なのは、「分散（deconcentration）」を進めて行くことだ、と私は考えています。そして「分散」は、今後の日本の発展の仕方と大きく関連していると思います。

では、「分散」を進めるとどういふ良いことがあるのでしょうか。「分散」と生活の豊かさはどのように関連してくるのでしょうか。

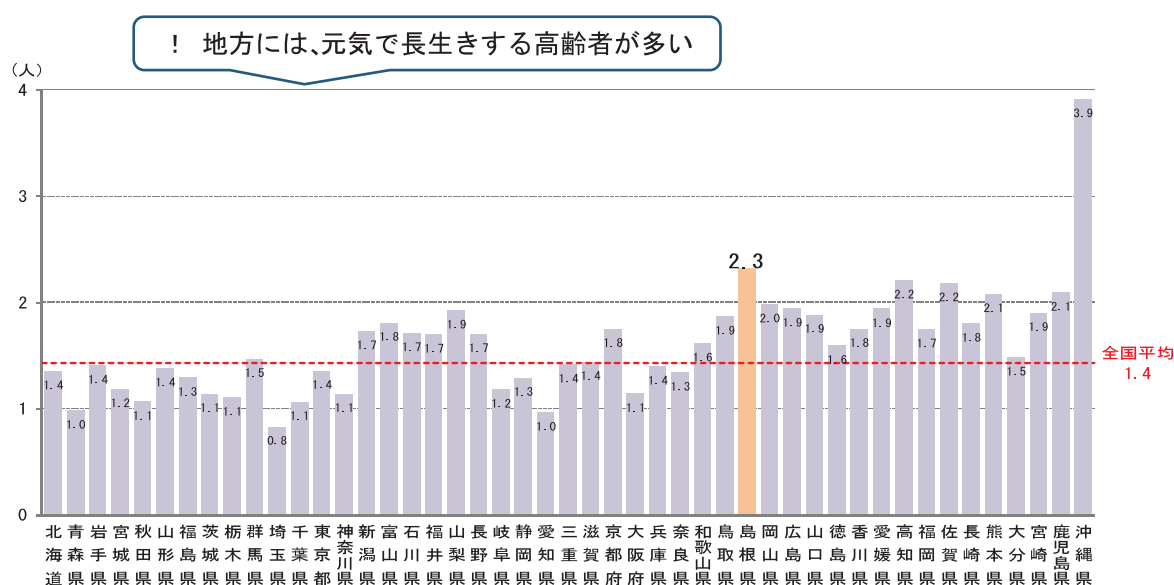
島根県は全国平均に対して、通勤時間が短く、住居が広く、自然が豊かです。また、島根県の高齢者には元気な方が多いのです。

県内各地を訪ねてみると、80歳を超えた方が元気に田畑に出て、農作業に従事しておられる姿をよく見ます。100歳以上の元気な人も多くおられます。

元気な高齢者が多いと、老人医療費は少なくて済みます。

高齢者（65歳以上）千人当りの100歳以上高齢者

図表24



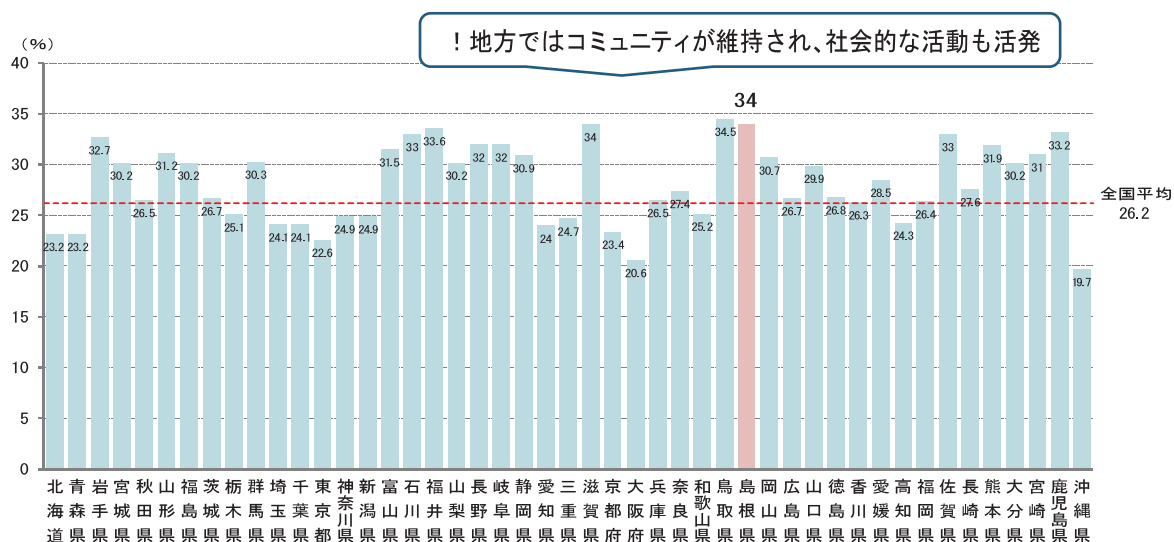
資料：人口は、「平成20年10月1日現在人口推計（総務省統計局）」。百歳以上高齢者数は、9月15日時点における年齢を基礎として計算。

さらに、ボランティア参加者が多く、島根県は鳥取県に次いで全国2位です。犯罪発生率は低く、犯罪検挙率も高い方です。温かな人間関係や地域社会が残っていることも影響しているのでしょう。

地方の豊かな地域社会と、人は密集しているがそれぞれが孤立した大都市の生活との際だった対比は、私が島根で強く感ずるところです。こうしたものが失われた大都市では、温かい社会を再構築することは至難の業でしょう。

ボランティア行動者率

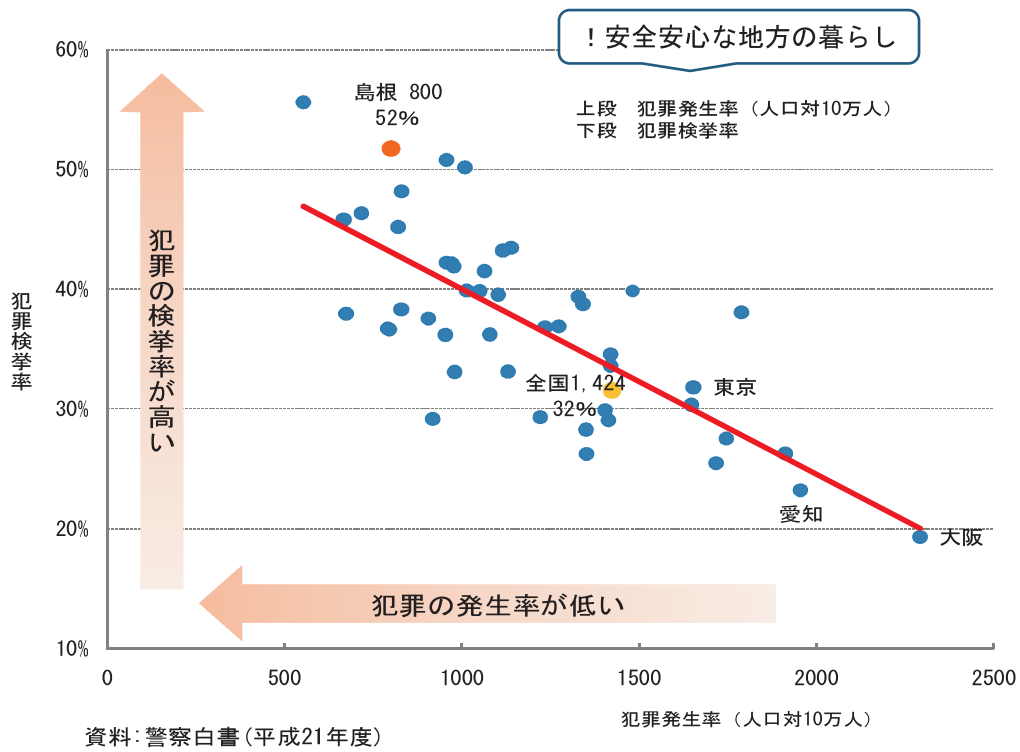
図表26



資料：平成18年社会生活基本調査（総務省）

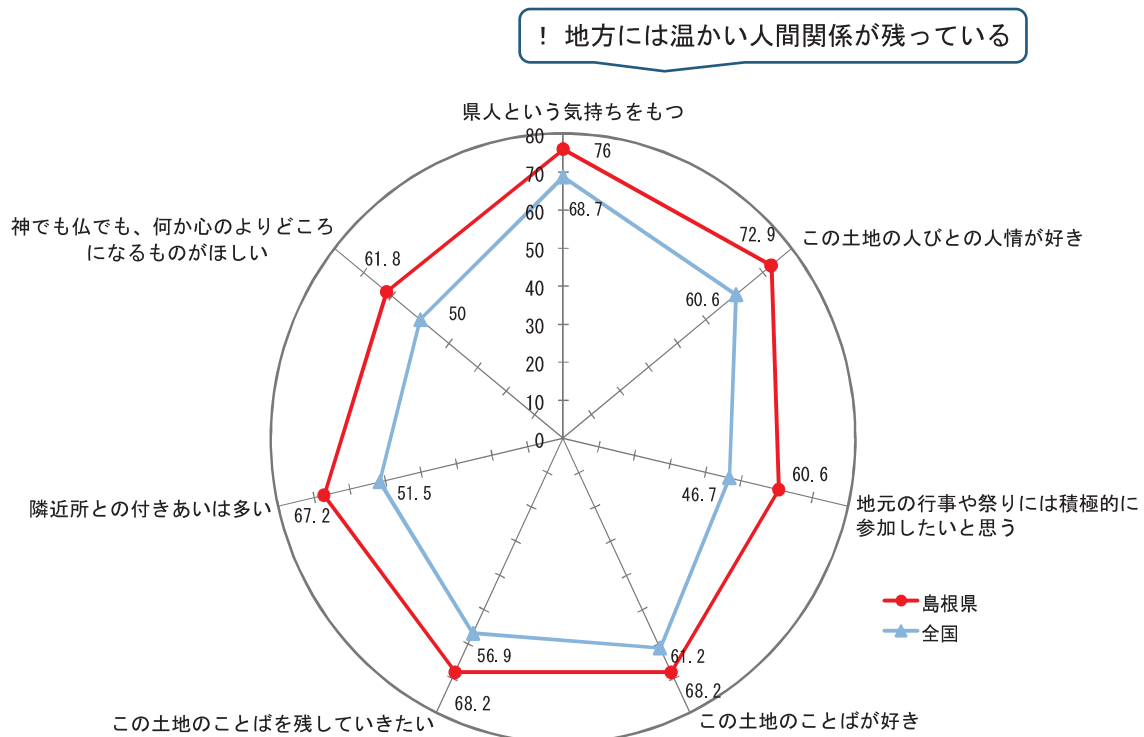
犯罪発生率と犯罪検挙率

図表27



島根県民気質の特性

図表28



資料: 現代の県民気質 全国県民意識調査 (NHK放送文化研究所 (1997)) 1996年に同研究所が各都道府県900人 (全国42,300人) を対象に調査。 注意: 全国平均に対して有意差 (99%信頼区間) があった項目を掲載

日本全体は成熟した時代に入りましたが、欧米に追いつこうとするプロセスの中で、人口を一部の地域に集中させ、大都市を生みだしました。しかし、これからは大都市以外の地方に人口を分散させることが真に豊かな日本を築くのに必要な時代になっているのです。

地方でもいろいろな仕事が出来て、分散が可能な時代になっています。地方の発展を阻害していた交通や情報の格差が小さくなっています。地方を整備すれば、大都市でなくても、地方でもいろいろなビジネスができるのです。インターネットの出現がこの動きを加速しています。

さらに、みんなが同じような価値観をもち、画一化された行動をするのではなく、いろいろなユニークな考え方をし、自由な発想ができるような環境を作り、いろいろ問題に配慮していくことで、人間らしい豊かな生活が可能になります。

人々は豊かな自然や伝統文化の中でゆったりした生活をすることによって、クリエイティブな仕事ができるのです。きれいな水と田園で人々の求める豊かな食物が生産されるのです。

おわりに

これから先を見渡しますと、グローバリゼーションはさらに進むでしょう。国際的な競争はさらに激しくなるでしょう。日本はこうした動きに遅れないよう、技術、知識、企業活動などでは世界の先端を走っていかなければなりません。そのための政策努力は当然、必要です。しかし、輸送網とインターネットの発達によってビジネスだけでなく技術開発なども大都市だけでなく、地方でも出来る時代になっています。

他方、人々が安定して豊かな生活を楽しむためには、これまで述べてきましたように少しローカルでナチュラルな空間、即ち地方を必要とします。

この二つのバランスをうまくとっていくことが、今の日本にとって最も必要なことです。

日本では、大都市化が進み過ぎているのが現状ですから、このバランスをとるためには当面、大都市から地方への分散（deconcentration）が必要です。

そしてそのための政策、つまり地方をもう少し大事にする政策が国レベルで取られることが必要だというのが私の考えです。

そのための具体的な方策については、私も参加した11県の知事による「ふるさと知事ネットワーク」が作成して、平成22年5月20日に公表した「政策提言」（本書「付録」P51～64）を参考にして下さい。

コラム 一 島根から伝える「地方の世界」

地方だからこそ残されている「人」としての豊かな生き方、それを可能にする自然や文化、伝統、さらに地域社会を我々は守っていかなければなりません。島根の知事をしながら、そうした地方の良さを感じたり、考えさせられた折りなどに、ときどき小文を書いてきました。

以下のコラムで私が見ている「地方の世界」をのぞいてみてください。

1. 古代出雲 —『古事記』や『風土記』の世界

3月の三連休初日。久々の快晴。我々夫婦の散歩コースの一つ、松江市郊外の「はにわロード」へ出かける。

12時半に松江市県庁前から八重垣^{やえがき}神社行きのバスに乗る。30分ほどで「はにわロード」の起点、八重垣神社に着く。八雲立つ風土記の丘を結ぶ約2.0kmのルートだ。

八重垣神社は「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」の古歌で名高い神社で、すぐに神話の世界に入る。素盞鳴尊（すさのおのみこと）と稲田姫（いなだひめ）を祀り、最近では縁結びスポットとしても有名。ここの「鏡の池」では、社務所でいただいた和紙にコインを載せ、それが沈む早さ遅さで縁談を占うのが若い女性に人気がある。

八重垣神社をスタートし、水田わきの心地よい散歩道をそぞろ歩く。トサミズキ、サンシュユ、ユキヤナギなどの春の花。ウグイスの声も聞こえる。道沿いには所々に埴輪（はにわ）を模した置物が置かれている。

それから林の中を少し歩くと、神魂^{かもす}神社へ到着。もともとこの地にあって、神魂神社は国造家^{こくそう}の私斎場として使われていた由。深閑とした境内にいただけでいい所に来たという気になる。

さらに、「こんな田舎に？」と不思議に思う人がいるかもしれないが、ここには現存する最古の大社造りの社として国宝に指定されている本殿がある。

神魂神社から八雲立つ風土記の丘へ向かう。この途中に「出雲かんべの里」がある。民芸体験や出雲の昔話を聞いたり、食事もできる。

そこから少し行くと「八雲立つ風土記の丘」だ。岡田山古墳を含むこの風土記の丘周辺は、古（いにしえ）の出雲の中心であり、出雲国庁があったところだ。

風土記の丘にある学習館では、古代出雲の様子を再現したジオラマで、出雲の歴史を学ぶことができる。「見返りの鹿」と言われる後ろを振り向く見事な鹿の埴輪が^{みもの}見物だ。

入ると、休日だというのに、館長の本間さんが当番だということで出ておられて、少しお話を聞いた。「この地は狭いところではあるが、意宇川の上流に位置し、船での交易の跡が残っている。また、古代に島根半島へ向い、そこから隠岐に船の出る港への道も残っている」のだそうだ。当時は、土木工事が発達していない時代であり、水をコントロールするには手頃の広さだったのだろう。

「風土記の丘」から1.5kmくらいの範囲内に出雲国庁、出雲国分寺、国分尼寺、国庁の正倉などが点在している。国庁跡へは、田んぼの中をゆったり散歩して30分弱だ。

昨秋案内した東京の友人夫妻も「はにわロード」の風物は、正に日本の原風景だといたく感動していた。人に知られない古代世界があるということだろう。

帰りは「風土記の丘」の付近のバス停から30分で出発点に戻る。行き帰りのバスで1時間少々、散歩、見物（見学？）で2時間少々。4時間弱の手頃なハイキングだった。



風土記の丘



神魂神社

（島根県のホームページ<http://www.pref.shimane.lg.jp>から「ようこそ知事室」の「私の島根『見聞き書き』」にお進み下さい。）

2. 島根のこころとからだのリフレッシュスポット

新緑が目鮮やかなゴールデンウィークの最終日、松江市から南へ約80km、車で約1時間半ほど走り、国道54号沿いに広がる県境の町「飯南町」へ行く。そこで国道から東に少し入って到着したのは「県民の森」。

ここには、オートキャンプサイトのほか、炊事棟やバーベキューサイト、コインシャワー、水洗トイレなどが整備されており、緑豊かな自然に囲まれた静かな山あい、快適なアウトドアライフが楽しめる。

また、宿泊室・食堂・浴室などを備えた研修宿泊施設「研修館」もあり、校外学習や各種研修、山歩きの拠点、合宿やリフレッシュの場として利用できる。

今日のメインは「森林セラピー」。「県民の森」は山陰唯一の森林セラピー基地として、多くの人に親しまれている。その魅力を体験しようというのが、今回の目的。

お昼前に到着し、まずは腹ごしらえ。

来る途中、国道沿いの道の駅『赤来高原』の薬膳レストラン「ローワン」さんで買った『薬膳弁当』をあける。食材はすべて近辺のもの。県産和牛や町内産の新鮮な野菜やヤマメ、山菜、特産品として売り出し中のヤマトイモのほか、生薬のナツメ、クコ、松の実などもある。味も彩りも申し分なし。屋外の東屋で爽やかな風に吹かれながら食べるのがよい。

昼食を終え、いよいよ「森林セラピー」へ。ご案内いただく森林セラピーガイドの皆さんから、森林散策によるリラックス効果などについて説明を受けた後、準備体操をし、歩き始める。

スタート後、清流小田川沿いの平坦なコースを歩きながら、ハナイカダ（ミズキ科）やヤマブキ（バラ科）など、この時期ならではの花を楽しむ。ガイドの皆さんの親切な説明があるので、とてもわかりやすい。



ハナイカダ

川沿いの道を右に折れ、緩やかな上り道に差しかかる。

シイタケのホダ木が立ち並ぶきのご園を通り過ぎると、才谷コースのよく手入れされたヒノキ林に入る。優しく差し込む木洩れ日とウッドチップが敷き詰められたフカフカの柔らかい遊歩道がとても心地よい。

沢からの水が流れを作り、姿は見えないがカエルの声も聞こえる。道端にできた小さな水たまりに多くのオタマジャクシがいたのにはびっくり。この山の保水力で守られ、また命を繋いでいくのだろう。そういえば、この森は、どこにいても、いつも川のせせらぎがバックグラウンドミュージックのように聞こえてくる、特別な空間になっている。

さらに進むと癒しの森、山野草園に出る。ここでも季節のいろんな花が楽しめる。特に印象的だったのがヤマシャクヤク（メギ科）。見事な白い花がそこここに凜として咲いている。



ヤマシャクヤク

山野草の勉強もしながら歩みを進め、ガイドの方々おすすめの「座観ポイント」へ。

大きな木の下に座り込み、しばし瞑想。川のせせらぎ、鳥の声、森林の香り、木肌のぬくもり、清浄な空気。からだ全体が森の精気にやさしく包み込まれる感じだ。

県民の森を後にし、車で走ること約20分。国道54号から国道184号へと入り「^か加田の湯」へ。

この温泉は、源泉掛け流しで、神経痛、筋肉痛、関節痛などによく効くとのこと。岩風呂、桧風呂のほかサウナもある。ウォーキング後の体をにごり湯の中で伸ばせば、気分そう快。

お風呂の後の楽しみは夕食。ここ加田の湯では、地元の皆さんが地域の食材をふんだんに使ったお料理でもてなして下さる。セラピーとこうした食事では体中の血液が浄化される気分になる。

お風呂だけの利用も可能で、近隣からも多くの方々が利用されているとのこと。
食事を終え、飯南町の中心の国道沿いに建つ町営の「憩いの郷・衣掛（きぬがけ）」
へ移動。明るく清潔な館内には洋室・和室がそれぞれあり、料金も低廉。

翌朝は、快眠でさわやかな目覚め。妻と朝の清気の中を散歩に出掛ける。近所にはぼたん園や、モミの巨木がそびえる赤穴八幡宮（あかなはちまんぐう）があり、
いい所に来たなぁという気分になる。

その後、衣掛荘から歩いて3分の国道沿いの「道の駅赤来高原」にあるレストラン「ローワン」で朝食。前日のお弁当もお世話いただいたお店だが、仕事で広島へ行くときなどに、時々寄っていて、女性シェフのMさんはよく知った方。薬膳がゆ、焼きたてのパン、サラダなどの朝食は、Mさんならではのもの。

こちらでは、地元で収穫された野菜をふんだんに使用した「日替わり薬膳ランチ」（1,200円）も大人気。味はもちろん、盛りつけの美しさも素晴らしい。今回は食べなかったが、シャキッとした旬の新鮮野菜がカレーと良く合う「薬膳カレー」（880円）もある。予約をすれば、昼はフレンチ風薬膳料理、夜はディナーコースが楽しめる。

Mさんが工夫をこらした料理は一級品だ。広島県など県外からこられるお客も多い由。私は「東京などに店を出せば、若い女性などには大人気になりますよ」といっつも言うのだが…。

のんびり森林セラピー、ゆったり温泉、おいしい自然食、この3点セットが飯南町セラピーだ。是非、試してみてください。

（島根県のホームページ<http://www.pref.shimane.lg.jp>から
「ようこそ知事室」の「私の島根『見聞き書き』」にお進み下さい。）

3. 美保関みほのせきの古刹と灯台

10月の三連休最終日、朝から好天。妻と時々行く八重垣神社方面への"バスand散歩"に出かけることにした。

ところが、バス停でバスを待っていると「美保関」行きが先に来て、妻が「これ、どう？」と言う。私も「そうだな」と、予定を変えてこれに乗り込んだ。

中海のそばを走るバスから、大根島や、遠くに雄大な大山を見る。絶景かなと思う。

バスが終点到着。が、私が思っていた美保関のまちまでにはまだ相当あるはず。少し焦って周囲を見渡すと、バスターミナルには小型のバスが私たちを待っていた。ここからは美保関町民バスに乗り換えるのだ。

再びバスにゆられること30分。途中、境港方面から来たであろう女性の旅行客数人を乗せ、バスは「美保関」に到着。境からもバスで来れるのだ。

まず、隠岐に配流された後鳥羽上皇、後醍醐天皇あんざいしよの行在所ぶつこくじであった仏谷寺に向かう。本堂には鍵がかかっていた…。すると、ご近所の女性が「あ、鍵を開けますよう」。

二人で600円を納めて拝観。国の重要文化財で山陰最古の薬師如来、月光、日光菩薩など5体の仏像があった。一木造りの立像は、2mを超える堂々たるもの。航海安全の守本尊として今でも港町美保関を守っている。

しっとりとした街並みが残る青石畳通りを散策し、地元の婦人会のグループが開いているお店に立ち寄る。これから向かう美保関灯台での昼食用に、いなりとちらし寿司、野菜の煮しめを購入。懐かしい蒸しパン（50円！）とお茶で一服。

さあ灯台へ！と、坂道を上っていく。立派な道路だが、車はあまり来ない。良い散歩道だ。眼下に日本海、遠くに大山。景色を楽しんでいると、30分ばかりで灯台だ。

フランス人技師により設計され1898年に初点灯されたこの灯台は、1998年に世界灯台100選に選ばれ、2007年には、灯台としては初めて国の登録有形文化財となった今も、現役で航海の安全を守っている。

早速、弁当を広げる。目の前には日本海が広がる。遙か遠くに隠岐の島影が見える。右が島後、左が島前だろう。

天気が良くても、その他の気象条件がそろわなければ隠岐の島が見えることはないとのこと。この日のバスを選んだ好運に感謝。

美保関には美保神社や関の五本松など他に良い所がいっぱいあるが夕刻、用事があり、早目に帰路につく。町民バスから一畑バスにスムーズに乗り継いで、松江には午後2時半頃到着。5時間足らずのride and walkであったが、気分爽快、得した気になった。



青石畳通り



美保関灯台

(島根県のホームページ<http://www.pref.shimane.lg.jp>から「ようこそ知事室」の「私の島根『見聞き書き』」にお進み下さい。)

4. 山あいの古城の町 — 月山山麓^{がっさん}

先日、会合があって月山山麓にある富田山荘を訪ねた。

ここは、清流富田川沿いの小高い丘の上であって、城下町広瀬町を一望できる。遠くは中海まで望むことができ、山手を見上げると月山富田城趾が目の前に迫っていて、なかなかの絶景だ。また、温泉もあって、露天風呂からの眺めがまた格別だと聞いた。

私が会合に参加している間に、同行した妻は城安寺を訪れた。

山門は出雲広瀬藩の第九代藩主松平直諒公により寄進されたもの。

寺は廃仏毀釈の難で全焼したが、山門は無事で、往時の姿がそのまま残っている。本尊脇侍の多聞天立像と広目天立像はともに鎌倉時代の作で、国の重要文化財に指定されている。富田城下町絵図や尼子十勇士絵巻も有名だ。

会が終わって妻と合流し、近くにある月山観光ふどう園でふどう狩りを体験した。私たちが行ったときは、ちょうど巨峰と安芸クイーンが収穫時期を迎えていた。

巨峰はその大きさから「ふどうの王様」と言われているが、甘い芳香とその味も素晴らしい。ここでは、季節に応じて、マスカット、ピオーネ、デラウェアなど、さまざまな品種のふどう狩りができる。今年のシーズンは10月4日で終わってしまったが、来シーズンには、皆さんもぜひどうぞ。

ブドウ狩りの後、再び富田山荘に戻り昼食に猪鍋をいただいた。

野趣あふれる料理というイメージの猪鍋だが、実際には、とても美味しい。猪は地元の猟友会から仕入れたもので、特産品化を検討中だそうだ。地元の食材をふんだんに使った、季節感あふれるメニューに仕上がることを期待しています。

昼食後、島根県登録観光ガイド「ふるさと案内人」の足立さんと依田さんに広瀬の町中を案内していただいた。

まずは巖倉寺いわくらじに向かう。

巖倉寺は、726年に建立された古刹で、本尊の見事な聖観世音菩薩は、国の重要文化財に指定されている。

1187年に現在の場所、富田城内の見上げるほど大規模な石垣の上に移転・建立され、城内の祈願所とされたそう。当時、尼子氏など歴代の城主たちに巖倉寺がいかに尊崇されていたのか、よくわかる立派なお寺だ。

巖倉寺には、松江藩開府の祖である堀尾吉晴公のお墓がある。高さ6メートルほどもある五輪塔の壮大で見事なお墓だ。

吉晴公は、豊臣の3中老の一人で、後には徳川家康の厚い信任を得て、1600年に、尼子氏、毛利氏に続いて富田城主となったが、1611年に居城を松江に移した。そのとき、「自分は松江に行くが亡骸はこの富田の地に埋葬して欲しい」と言い残したという。名城・富田城に対する愛着があったのだろう。

地元の方は、「世が世なら広瀬が島根県の中心になっていたかもしれませんね。」と語っておられた。

巖倉寺には、吉晴公に縁（ゆかり）のものがもう一つある。

本尊を安置している大きな厨子（ずし：仏像などを中に安置する箱のようなもので、正面に観音開きの扉が付く）だ。

ご住職の荒木さんにうかがったところ、この厨子は、吉晴公の奥方が寄進されたものだそう。吉晴公の時代からは実に四百年以上も経つが、大きな扉に残っている、多分、岩絵の具による彩色は驚くほど鮮やかである。よくぞ残っているという感じだ。

巖倉寺から少し上り「太鼓壇たいこのだん」に到着。

この名は、尼子時代にここに鼓楼が設けられ、太鼓で城下に時を報じ、戦の時は兵の士気を鼓舞していたことから名付けられたそう。

鼓楼のあった場所の下方には「千畳平」と呼ばれる広場がある。
ここにある椎の大木には、戦国時代、毛利方が尼子方に放った矢の鏃（やじり）の跡が残っていたそうだ。そうした激戦の地も、今では桜の名所「太鼓壇公園」として地域の方の憩いの場となっている。

太鼓壇を後にし、富田川を挟んで富田城趾の反対側にある富田八幡宮へ向かう。
富田八幡宮は、もとは月山山頂にあったものを、富田城築城にあたって現在の八幡山に移したと言われている。

社は小高い山の上であり、長い石段を登ると、本殿まで200mほどの真っ直ぐな長い、苔むした石畳が続いている。両脇は杉やけやきの大木がそびえ、鬱蒼とした中に凜と張り詰めた森厳な雰囲気があって、古い歴史を肌で感じる。

この参道を抜けると、「こんな奥まったところに、こんなにも…！」と驚くほど立派な本殿が現れる。

宮司の竹矢さんの話によると、代々の松江藩主もここによく来て参拝しておられたとのこと。

戦国時代の出雲の歴史を知りうる史跡が、広瀬にこれほど多く残っているとは不明にも知らなかった。

今度来的时候は、見た後、ゆっくり温泉にでも浸かって、富田川のせせらぎに耳を傾けながら、つわものどもが世界に思いを馳せるのもいいだろうと思った。



富田城趾

(島根県のホームページ<http://www.pref.shimane.lg.jp>から
「ようこそ知事室」の「私の島根『見聞き書き』」にお進み下さい。)

5. 松江 — 北堀町の鑿^{どう}

松江に住むようになって初めての年の秋、夜の会合が終わり、いい気分の家までの道をぶらぶら歩いているとき、顔見知りのIさんに声をかけられた。「こっちへきて鑿を打ってみませんか」。これが、私と鑿との最初の出会いだった。Iさんは松江の鑿行列を保存する会の会長で、ちょうど、町内の人たちと練習をしているところだったのだ。

このご縁で時々、練習や十月の鑿行列の前夜祭などに勝手参加をし、その後の飲み会などにも入れてもらったりして、準会員のような扱いをさせていただいている。

私は生来、音痴で音楽は聴くのは好きだが、歌ったり、楽器は全くダメ。鑿は何度も打っているが、いつもみんなのリズムから外れてしまう。私が、耳に頼らず、他の人の手の動きを目で見て合わせようとしているからだろう、そんな私のために親切な北堀町の人たちは、横に並んだり正面に立ったりして、大きな身振りで手本を見せて下さる。

しかしそれでも、必死で合わせようと気合いを入れ、体を動かして大きな音を出すのは気持ちがいい。普段使わない筋肉や神経に刺激を与えるからだろう。また、大きな鑿から発せられる重い音の響きには、人の拍動のリズムに合わせるかのような何ともいえない調子があって、それが心を落ち着かせてくれるのだろう。

打っているときも楽しいが、練習の後もまたいい。練習が終わると、近所のメンバーの家に子供も大人も皆、集まって、互いに持ち寄った料理などを囲んで、お茶やお酒を飲んだりして、この子は誰それさんの子供だとか、この料理はこの人が名人だなどと歓談をする。親子三代で鑿行列に参加している家もある。町外や市外から参加されている人もいる。

鑿のような伝統文化は、一定の人の集団の中で、個々の人の手や体の中に共通の動作などの形で蓄積され、高齢者が退かれても新しい人が入ってきて、集団が一定の規模で維持されることによって継承されていくということがよくわかる。そのためには、若い新入者が楽しく参加できなければならない。北堀町の鑿では、顔見知りや仲のよい地域の人達は、楽しさを作り出す仕方もよく受け継いでおられるようだ。

私は島根の良さについて語るとき、「豊かな自然や伝統、文化」に加えて、いつも「温かい地域社会と人間関係がここ（島根）にはある」と話している。これは、

島根県内各地を回ってみて感じたことなのだが、そうした地域社会が、松江ほどの都市の中心部にも残っているということは大きな驚きだ。

北堀町の鑿に参加して、伝統文化の継承の実際を目の当たりにしたような気がする。

※ 鑿とは、四尺（1.2m）から六尺（1.8m）ほどもある大きな太鼓のことで、毎年秋に、鑿を2～3台据えた屋根付き山車を子供達数十人が綱で引き、何台も連ねて打ち鳴らしながら市内を行列する「鑿行列」という祭りが行われます。江戸中期頃、松江藩主に京都伏見宮家から姫君が降家されたのを、町民が鑿を打ち鳴らして祝ったことが始まりと言われています。



鑿 行 列

松江文化情報誌 「湖都松江 vol.18」に寄稿

6. あなたも島根で暮らしてみませんか？

島根県知事の溝口善兵衛です。

私が最近、世の中の変化として感じることは、
大都市に住む若者たちの中に、
田舎で農業をやりたい、山で働きたい、漁船に乗って仕事をしたい、
といった人たちが増えているということです。

島根県は、工業化・都市化がやや遅れたため、
かえって、緑濃い森林、清らかな河川、湖沼、海、などが多く残っています。
こうした豊かで美しい自然の中で暮らしたいという若者たちが、
Uターン、Iターンなどの形で少しずつ島根に来てくれるようになっています。

こうした若者たちと話をすると、
島根に来る前は「農業の技術はどこで教えてくれるのか」、
「住む家はあるのか」など、不安がいっぱいだったと言います。
そして今は、「自然に近いところで働けるのが楽しい」、
「子育てもしやすい」と喜んで話してくれます。

そこで、私は、島根県庁の農林水産部の若手職員に、
そうした若者たちのためのガイドになるような本を
つくってはどうかと提案しました。

5人の県職員は半年かけて、
島根に定住した若者たちに会って話を聞き、
自ら写真を撮り、原稿を書き、編集まで手がけて、
地域に溶け込んで生きる若者たちの姿を、
すばらしい本にまとめてくれました。
それがこの「田舎ごち」です。
どうか、この機会に是非ご一読下さい。



そうだ、あなたも島根で暮らしてみませんか？

島根県の若手職員が作成した、島根へのUターンのためのガイドブック
「田舎ごち」(2009年3月31日発行 著者 鄙びと 定価1,500円)に寄せて

7. 地方から日本を考える

この4月郷里島根県の知事となり、実感することは若者の大都市集中と高齢者の地方偏在だ。島根の山間地域に挨拶などに行くと、大きな家の奥からゆるゆる出てこられるのはご高齢の方ばかりだ。他方、たまに東京に行って電車などに乗ると、若者だらけだ。

今、日本では出生率の低下で人口の減少と活力の減退が心配されている。しかし日本全体押しなべて出生率が低いのではなく、若者の多い大都市で特に低くなっているのだ。2005年の特殊合計出生率は東京の1.0に対し島根は1.5だが、全国平均は1.27と低くなっている。

日本の戦後の経済発展、さらにさかのぼれば明治以来の近代化・工業化が大都市中心に進んだため、若者たちは働き場の増える大都市に集まり、若者が出ていく島根など地方では高齢者の割合が高くなった。大都市の発展は、大都市での道路、住宅、下水道など生活・産業インフラの充実強化、高等教育機関などの整備を必要とし、そして整備が進むとさらに若者が地方から集まるという経路を辿った。若者の大都市集中と高齢者の地方偏在は表裏一体の関係にある。

大都市は便利で刺激的でさまざまなチャンスがあり若者を惹きつける。しかし大都市の生活は若者にとって決して楽なものではない。国際競争激化などにより雇用条件は厳しくなっている。正社員になっても会社内の競争は厳しい。通勤は満員電車で時間もかかる。残業で夜も遅い。住むアパートは狭く家賃も高い。共稼ぎでも生活は大変だ。自分の生活だけで精一杯だ。結婚して子供を生んでも手助けしてくれる母親などは近くにはいない。こうして大都市では若者が子供を生み育てることは段々容易でなくなってきている。

地方では職住近接で住居費も安く、自然が豊かで生活と仕事のリズムが安定しており、子育ては都市よりしやすく、出生"率"は低くないが、子を生む若者の数そのものが少ないので出生"数"が少ない。

これまでの大都市中心の経済発展は後発国日本にとっては必要なものであったが、大都市が自らの人口の再生ができなくなった今、この発展の仕方は限界に達したと考えるべきではないか。地方にもう少し資金を回し、遅れた地方の社会インフラなどを整備し、地方の発展を少し後押しし、若者の地方回帰を図るべき時代に到達したのではないか。

8. 不昧公の時代と現代

—『松江藩の財政危機を救え』を読む

「松江藩は不昧公の時代に、倒産状態の財政を立て直した」ことは知っていたが、二百年以上も昔のことで資料も十分残っていないだろうし、封建時代のことで現代にはあまり参考にならないだろうと思っていた。ところが、最近、松江在住の史家・乾隆明氏から自著の『松江藩の財政危機を救え』（2008年2月1日松江市教育委員会発行）という60ページ余の本をお送りいただき、読んでみてびっくりした。

第一に藩の重役の覚え書、会計簿、さらには藩外からの訪問者の見聞録などの資料により不昧公の行った改革や政策が相当程度判るということである。乾氏は過去の研究成果なども丹念に分析・整理をされて判りやすくまとめられておられる。

第二に、財政の健全化のためには支出を切り詰め、収入を増やすのが常道であるが、封建制度の下で強引に藩士の家禄削減などを行い、新田開発や農民の年貢の引上げなどを行ったのだろう程度に思っていた。しかし著者は、財政再建の中心は藩内での産業振興により特産品を作り、これを諸国に販売して「外貨」を稼いだことにあり、当時の「優れた経済感覚は、現代の我々と比較しても先進的」だとされている。

七代藩主治郷（不昧公）が明和四年（1767年）十七歳で藩政を引き継いだとき50万両（1500億円相当）の借金があった。藩の年貢等収入は約10万両（300億円相当）で借金残高は年間収入の5倍にもものぼった。この借金を三人の殿様で74年かかって返済したが、治郷の治世39年がその基礎を築いた。その返済記録の記念とも言うべき会計簿『出入捷覧』^{ていりしゅうらん}が残されていて、先人がこれを分析・解読しているのを著者はさらに判りやすくグラフなどにして示している。

著者はさらに『御金蔵御有金』^{ごきんぞうおんありがね}という藩の積立金会計とも考えられる資金の出入りも調べて、借金返済の財源の多くが年貢収入の増加以外の収入、つまり「石高制によらざる収入」から来ていると分析されている。年貢米収入も借金返済期間中ある程度は増えているが、江戸時代中期以降は貨幣経済が伸展して、石高に入らない産業の発展が大きな役割を演ずるようになったことに対応している。

つまり、お米の生産を基礎にしつつ、隠岐や島根半島ではアワビやナマコなど中華料理の食材を「俵物」として長崎に送って清国に売り、宍道湖周辺の丘陵地や川土手にはハゼを植えてロウソクを作って大阪へ積み出し、中山間地では薬用人参を

栽培し、藩の「人参方」で漢方薬として長崎で清国商人に売り、タタラ製鉄は全国有数の鋼を作り、平田の木綿は松江藩最大の「国益」産業に育った。百種類にのぼる「他国から金銭をかせぐ国益産業」を番付表にした『雲陽国益鑑』^{うんようこくえきかがみ}を見ると、現代以上に「外貨」を稼ぐ産業が活発だったようだ。文化人の殿様治郷は家臣に「貨殖理財につとめよ」と言って産業振興に力を入れた。この時期、松江藩の人口は産業の発展とともに増加し、薩摩、加賀などの雄藩を凌いでいたらしい。

著者は最後に「夢のような繁栄を誇った幕末の出雲国が、近現代になるとなぜ経済的な後進地域になったのか」と自問し、一言で言えば、「産業構造の変化についていけなかった」からだと自答している。例えば平田の木綿はインドやアメリカからの輸入品に押され、タタラ製鉄は釜石・八幡の官営の近代製鉄所に圧倒され、薬用人参は西洋医学に追われ、ロウソクはガス燈や電燈にとって代わられた。

今の島根を見ると戦後の工業化にも遅れて、最近は人口も減っているが、発展が遅れたためにかえって豊かな自然、古き良き文化・歴史、温かい人間関係といったものが世の中の変化の中で大きな強みになってきているように思う。私はこの強みを生かしながら産業発展を財政健全化と両立した経済の活性化を図っていく必要があると考えている。本書は私に強い刺激を与えてくれた。



松江城の四季

山陰中央新報に寄稿（平成20年3月7日掲載）

自立と分散で豊かな日本を

— 大都市と地方のこれからについて（政策提言） —

自立と分散で日本を変える ふるさと知事ネットワーク

青森県知事	三村 申吾
山形県知事	吉村美栄子
石川県知事	谷本 正憲
福井県知事	西川 一誠
山梨県知事	横内 正明
長野県知事	村井 仁
奈良県知事	荒井 正吾
鳥取県知事	平井 伸治
島根県知事	溝口善兵衛
高知県知事	尾崎 正直
熊本県知事	蒲島 郁夫

はじめに

日本は戦後、人・物・資本を都市部に集中投資することによって、短期間に高度経済成長を達成しました。その一方で、都市では、人口の過密化に伴うさまざまな社会問題が発生し、地方では、社会資本整備の遅れや過疎化を招いています。

科学技術や企業活動の分野で世界をリードし、国際競争力を高める上で、都市の役割は確かに重要です。しかし、日本の経済・社会は成熟化し、都市の突出した成長により国全体の発展を引っ張る時代では、もはやなくなっています。また、都市の魅力をさらに高めるためにも、ゆとりある生活環境を整えることが求められています。

一方、地方は、厳しい状況にはありますが、今なお豊かな自然・文化・伝統、子育て世代や高齢者にやさしい居住環境、人と人とのつながりや絆の強さなど、都市にはない魅力が残っています。また、森林等の水源かん養やCO₂吸収といった環境保全をはじめ、食糧やエネルギー供給面でも大きな役割を果たしています。このような地方を、国民全体の知恵を結集して活かしていくことは、都市の活動を存続するためには欠かせません。

都市に集中している人材や資本が国全体で活用され、国民一人ひとりが活躍できる社会になれば、わが国の潜在能力は今以上に発揮されるのではないのでしょうか。

都市と地方がそれぞれの特長を最大限に活かし、お互いに補完し合う新しい関係を築くために、われわれは、以下の政策を提言します。

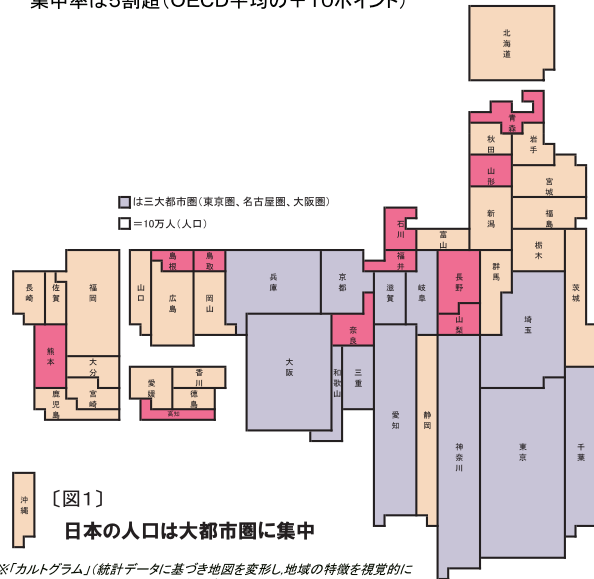
ふるさと知事ネットワーク政策提案の視点

いまの日本の社会構造、国土構造を直さない限り、豊かな日本を創造することはできません

○人口、学生(大学生・短大生)は大都市圏に集中

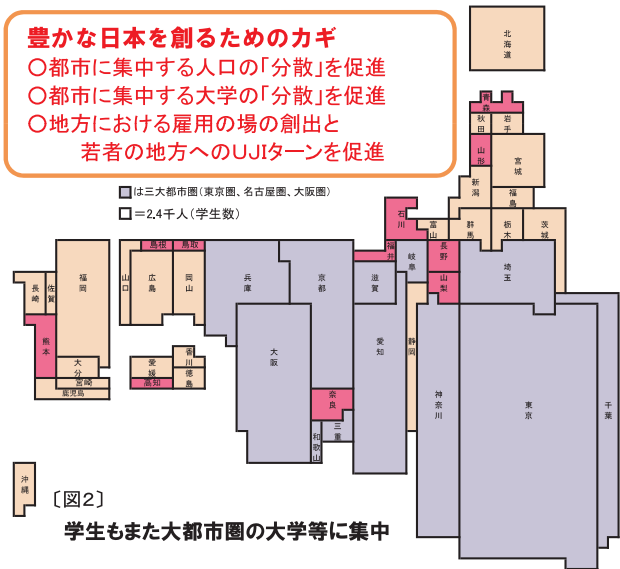
・東京への人口の一極集中が再び加速化
(1000万人→1100万人→1200万人→1300万人)
1962年 1966年 2000年 2010年

・三大都市圏(東京圏、大阪圏、名古屋圏)への人口集中率は5割超(OECD平均の+10ポイント)



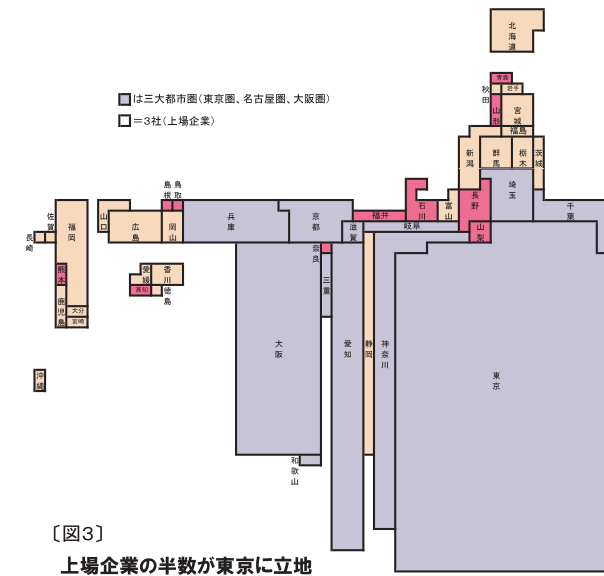
・学生総数300万人のうち、3分の2が三大都市圏の大学・短大に在籍
・学生総数300万人のうち、4分の1が東京都内の大学・短大に在籍
東京都内 約190の大学・短大に約74万人の学生
大阪府内 約90の大学・短大に約24万人の学生
愛知県内 約80の大学・短大に約20万人の学生

豊かな日本を創るためのカギ
○都市に集中する人口の「分散」を促進
○都市に集中する大学の「分散」を促進
○地方における雇用の場の創出と若者の地方へのUターンを促進



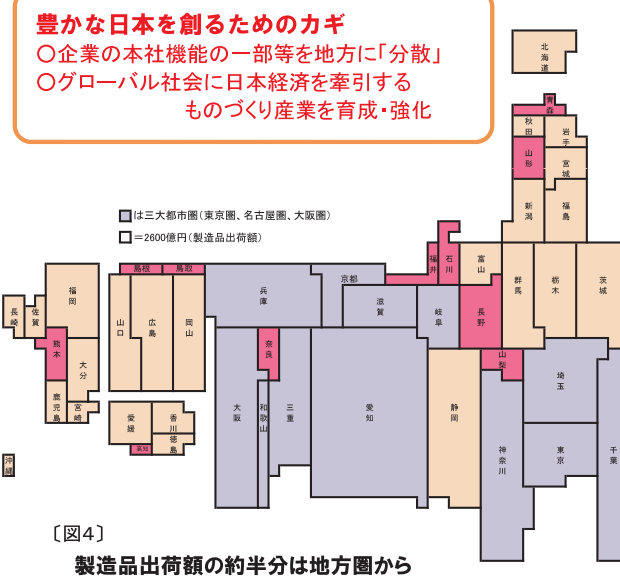
○企業や産業の集中

・上場企業(本社)の約5割が東京に集中
東京都内 国内上場企業約4000社のうち約2000社が立地
大阪府内 " 約500社が立地
愛知県内 " 約240社が立地
・三大都市圏以外の地方圏における上場企業は全体の16.2%



・日本の産業構造は「ものづくり」から「金融・サービス業」にシフト
・日本のものづくり産業は地方圏が牽引
製造品出荷額等の額は三大都市圏以外の地方圏が約5割

豊かな日本を創るためのカギ
○企業の本社機能の一部等を地方に「分散」
○グローバル社会に日本経済を牽引するものづくり産業を育成・強化



- 豊かな自然・森林環境は地方に偏在
 - ・森林面積の85%は三大都市圏以外の地方圏に偏在

豊かな日本を創るためのカギ
 ○地球環境問題が深刻化する中で、地方に偏在する自然・森林環境を国全体で活かす仕組みづくりを推進



〔図5〕
 CO₂吸収源である森林の85%が地方圏に偏在

地方が役割を発揮するための政策提案

◎地方の力を活かし、国や大都市の課題を解決

- 1. 企業の地方分散により大都市の過密と少子化を改善 P 1
- 2. 大学の地方分散により優れた「知」の全国拡大・活用 P 5
- 3. 都市住民に地方の豊かな暮らしを提供 P 7
- 4. 都市の高齢化問題の解決を地方が応援 P 9
- 5. 地方の資源を活かした日本の環境保全対策 P13

◎地方の力を活かすための必要条件

- 6. 高速交通網整備による都市と地方のネットワーク化 P17
- 7. 人口の地方分散を支える地域医療の確保 P19
- 8. 地方が日本の発展に貢献するための財源確保 P21

P 1

1. 企業の地方分散により大都市の過密と少子化を改善

課題 大都市の企業集中による生活環境の悪化

企業が集中する大都市に人口も集中し、生活環境が悪化しています。また、都市ほど少子化が進んでいます。さらには、過密な都市では、大地震等の災害発生時のリスクも拡大します。

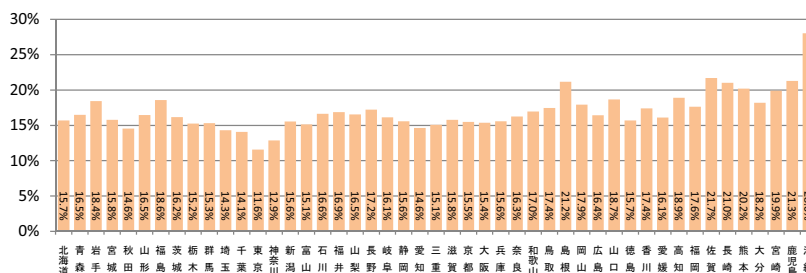
対策 地方に企業を分散

都市から地方への企業移転や地方の資源を活かした産業育成を促進します。移転により、都会よりも多くの子どもを産み育てている地方に人口が分散し、少子化傾向に歯止めがかかります。

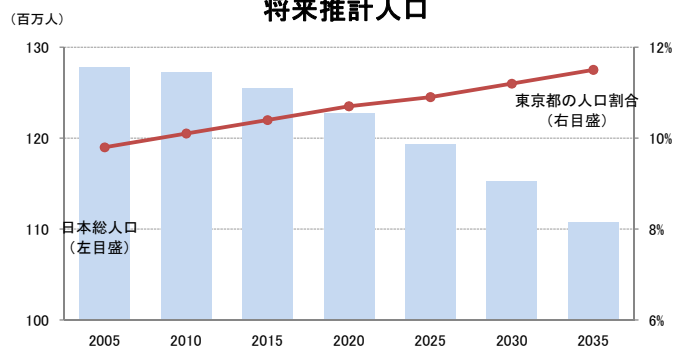
効果 バランスのよい企業立地と少子化の改善

都市の過密な生活の改善と地方の産業振興、全国各地でゆったりと子育てができる環境が整います。

第3子以降の子どもの出生割合
(平成20年人口動態調査 第3子以降の出生数/年間出生数)

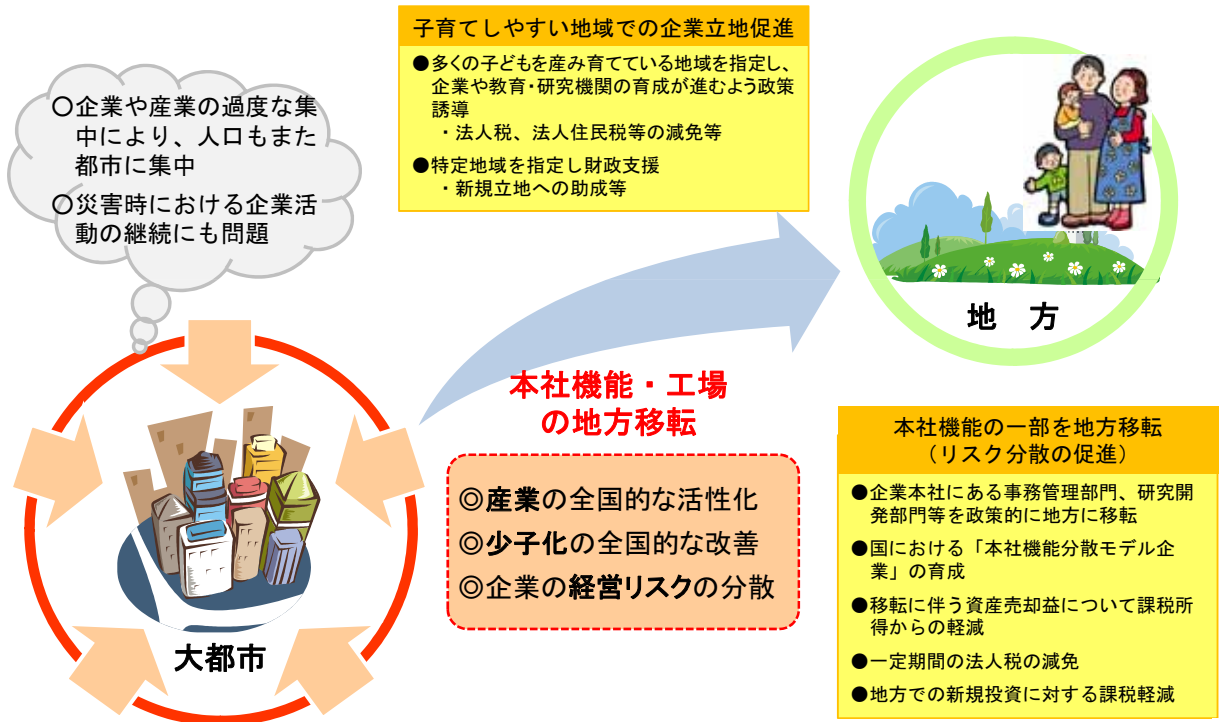


将来推計人口



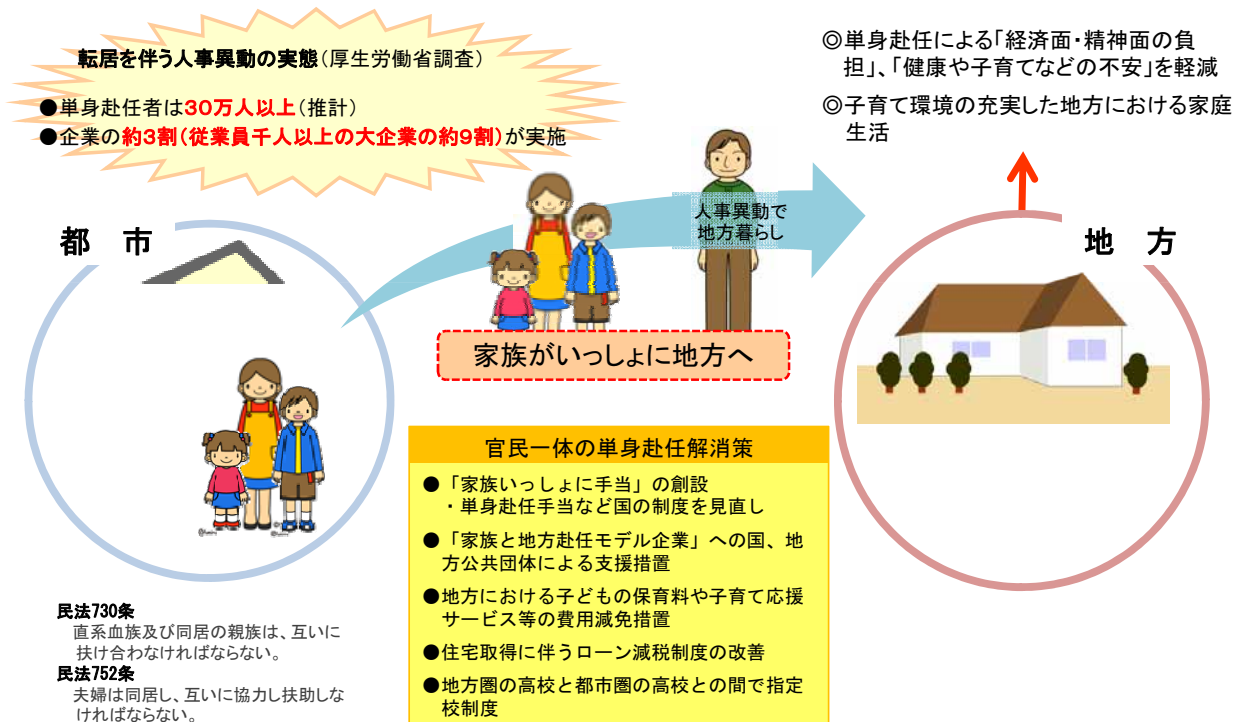
政策例 1-1 大都市の企業の地方移転促進

◎ 大都市に立地する企業を、多くの子どもを産み育てている地方などに移転することにより、人口の地方分散と少子化の改善、経営リスクの分散を促進



政策例 1-2 家族がいっしょに行く地方赴任の促進(単身赴任の解消)

◎ 「家族いっしょに手当」の創設など、国内の異動・転勤に伴う単身赴任を減らすための対策を実施し、家族がいっしょに暮らすことができる社会を実現



2. 大学の地方分散により優れた「知」の全国拡大・活用

課題 大学の都市集中による若者の地方流出

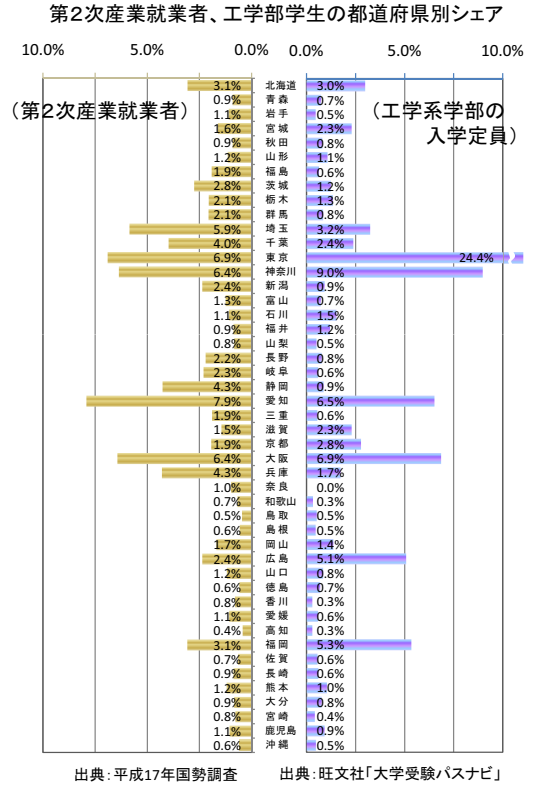
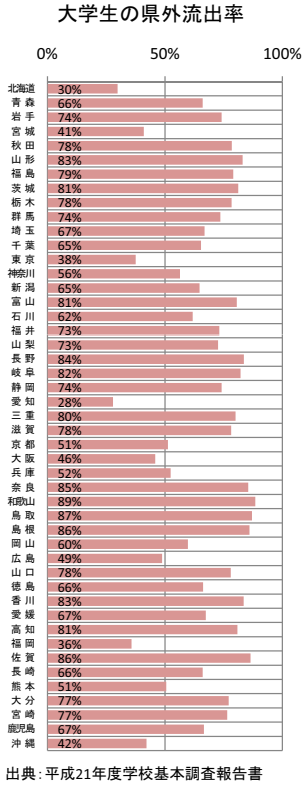
地方で生まれ育った若者の多くが、都会の大学等に進学し、そのまま都会で就職しています。また、都会の大学等への進学に伴う親の負担は大きな問題です。

対策 大学、学生の地方への分散

大学間連携による地方の大学教育の基盤を強化し、学生の地方への分散・定着を促進します。

効果 日本経済を支える地方人材の育成

地方に若者が就学・定着し、日本の「ものづくり」を地方が支える社会が実現します。



政策例 2 大学生・大学教員の「ローカル・キャリア」促進

◎ 都市の大学に学ぶ学生に、日本のものづくりを引っ張る地方で「ローカル・キャリア」を積む機会をつくり、日本経済・社会の活力を高める地方の「技術力」、「製品開発力」を強化



大学間の新しい連携システム

- 地方大学において、都市の学生が「ローカル・キャリア」を積めるネットワークを創出
 - ・ 「ローカル・キャリア」を国が認定
 - ・ 地方の連携大学に対する国や地方公共団体の研究費支援、財政支援

地方の産学連携プロジェクトへの国の支援措置の拡充

- 企業・大学プロジェクトの助成拡充
 - ・ 地方の研究開発への別枠補助
 - ・ 補助金の前払い要件を緩和
 - ・ 研究から事業化まで、弾力的な運営ができる公的基金
- 地方への研究者の招聘を支援
 - ・ 研究者招聘のための人件費・研究費を地方大学に助成

大学の地方分散を促進

- 大学定員の見直し
 - ・ 都市部大学の定員減と地方大学の定員増 (工学系、農学系の学部・学科など)
- 地方大学の「入学金」「学費」の減免措置
 - ・ 地方大学の減収分を、国立大学法人運営費交付金や地方交付税等で補填・優遇

3. 都市住民に地方の豊かな暮らしを提供

課題 過密な都市生活における閉塞感

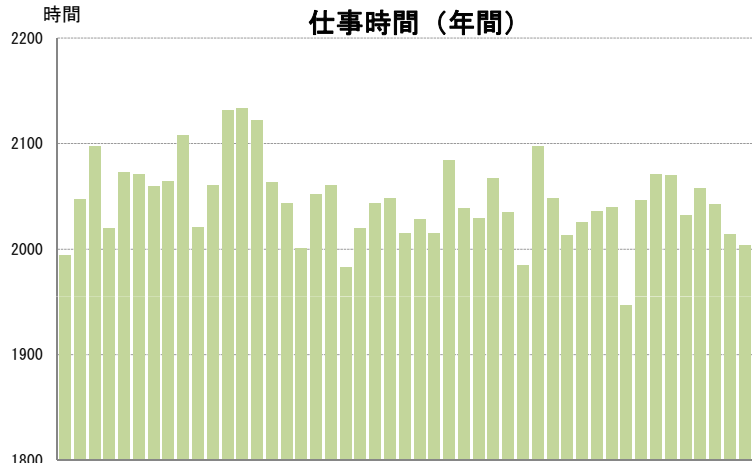
人口が集中する都市では、狭い住宅や長い通勤時間など日常生活面での苦労があります。一方、地方には未活用の空き家が増えています。

対策 地方での暮らしの場を提供

豊かな自然などが残されている地方への移住は、都市住民に新たな生き方を提供します。

効果 質的に豊かな国民生活の実現

新しい人の動きが促進され、日本全体の活性化につながります。



北 青 岩 宮 茨 山 福 茨 茨 群 群 千 東 神 新 富 石 福 山 長 岐 静 愛 三 滋 京 大 兵 奈 和 鳥 島 岡 広 山 徳 香 愛 高 福 佐 長 熊 大 宮 鹿 沖 海 森 手 城 田 形 島 城 木 馬 玉 美 京 奈 川 山 川 井 梨 野 早 岡 知 重 賀 都 飯 庫 良 取 根 山 島 口 島 川 媛 知 岡 賀 崎 本 分 崎 児 徳 道 県 県 県 県 県 県 県 都 県 県 県 県 県 県 県 県 県 県 県 府 県

仕事関連時間 = 「総実労働時間 + 往復通勤時間」と定義
資料：総実労働時間・・・毎月勤労統計調査（平成19年・厚生労働省）の内、総実業計、事業所規模5人以上
通勤時間・・・住宅・土地統計調査（平成15年・総務省）
出勤日数・・・年間220日と仮定

政策例 3 地方暮らしチャレンジ住宅制度

◎ 都市住民が地方の暮らしを始められるよう、専用の住宅を提供。移住者に対する優遇措置を実施するなど、住み替えを促進



都会住民に豊かな生活環境を提供



地方におけるチャレンジ住宅設置促進

- 行政・民間の住宅供給に対する国の支援
- 空き家を有効活用する新しい仕組み
- 民間設置者への税制優遇（高齢者向けの優良賃貸住宅並み）
 - ・ 所得税、法人税の割増償却
 - ・ 不動産取得税、固定資産税の減免（地方の減収分は交付税で補てん）
 - ・ 住宅金融支援機構からの融資の優遇（融資枠の拡大、低利融資）



都会からの移住者への優遇策

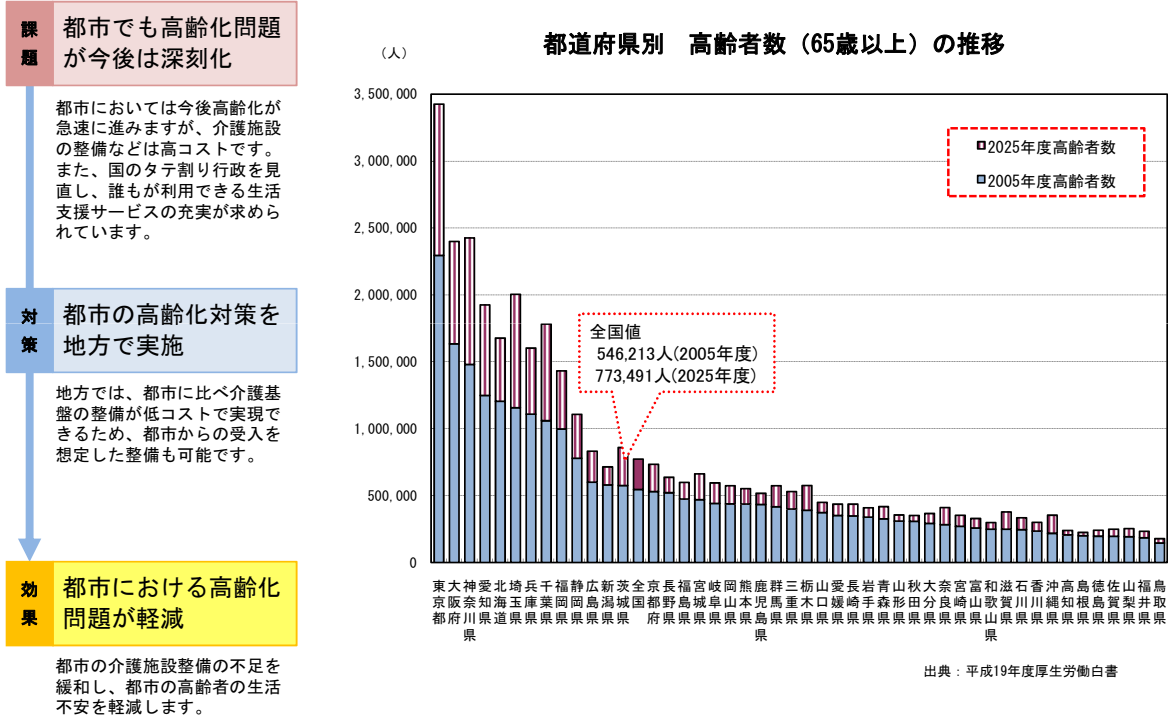
- チャレンジ住宅入居者への税制優遇（例）
 - ・ 移住前の住宅の売却益に対する所得控除を拡充（マイホーム売却時の通常の控除3,000万円に特別加算）
 - ・ 移住に伴う経費（例：引越費用）を所得控除
- 農地利用の規制緩和
 - ・ 家庭菜園程度の小規模な農地利用の自由化

地方暮らしチャレンジ住宅

○ 気軽に地方での暮らしが楽しめる都会からの地方移住者向け賃貸住宅

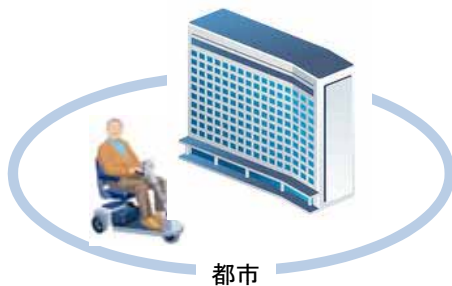


4. 都市の高齢化問題の解決を地方が応援



政策例 4-1 都市の高齢者を受け入れる介護施設を地方に整備

◎ 地方の介護施設に入所を希望する都市の高齢者を受け入れるため、地方における施設整備を促進する国の助成制度を創設するとともに、介護保険制度の見直しを実施



都市

都市の高齢者に安心して老後を暮らせる場を提供

- 介護保険制度の見直し**
- 都市の高齢者の受入に限定した介護保険サービスの創設
 - ・施設の利用者は、都市の高齢者
 - ・施設への入居に伴う医療費や介護費は、移住前（都市）の市町村が負担
 - ・現行の制度とは、別枠で整備が可能
 - ・従事者の処遇を改善し、人材を確保

- 施設整備への助成**
- 行政・民間の建設に対する国の支援
 - 民間設置者への税制優遇
 - ・所得税、法人税の割増償却
 - ・不動産取得税、固定資産税の減免（地方の減収分は交付税で補てん）
 - ・福祉医療機構からの融資の優遇（融資枠の拡大、低利融資）



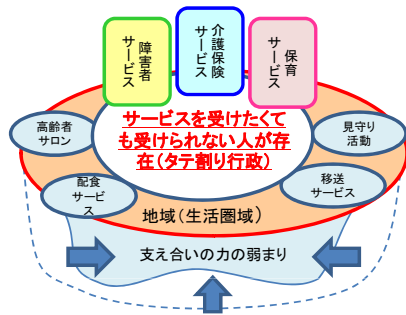
地方

高齢者向け介護施設

○自然や地域とのふれあいの中で、豊かな老後がおくれる介護施設を提供

政策例 4-2 少子高齢社会に対応した総合的な生活支援サービスの充実

- ◎ 子育てや高齢者福祉、障害者福祉など多様な住民サービスを一か所で提供する仕組みを全国に導入し、住民生活の維持・向上と雇用の場を創出

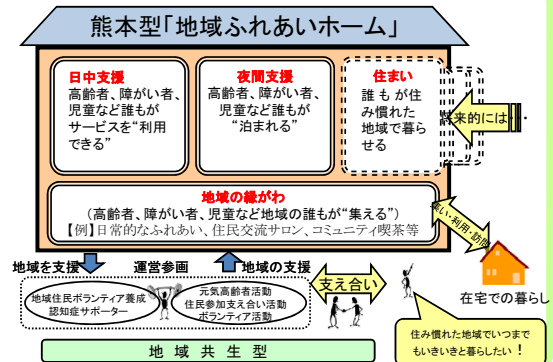


地方での総合的な生活支援対策は、超高齢社会の先進的モデル

誰でも使える生活支援サービスの拡大

- 子どもから高齢者まで年齢や障害の有無にかかわらず、一箇所で必要なサービスを受けられる支援拠点の整備を制度化(全国に拡大)

地方での先進的な取り組み



5. 地方の資源を活かした日本の環境保全対策

課題 地球温暖化など環境問題の深刻化

CO₂排出削減義務の拡大が、産業活動の負担になることが危惧されています。一方、里山・里山がある農山村の森林整備は、環境保全に貢献します。

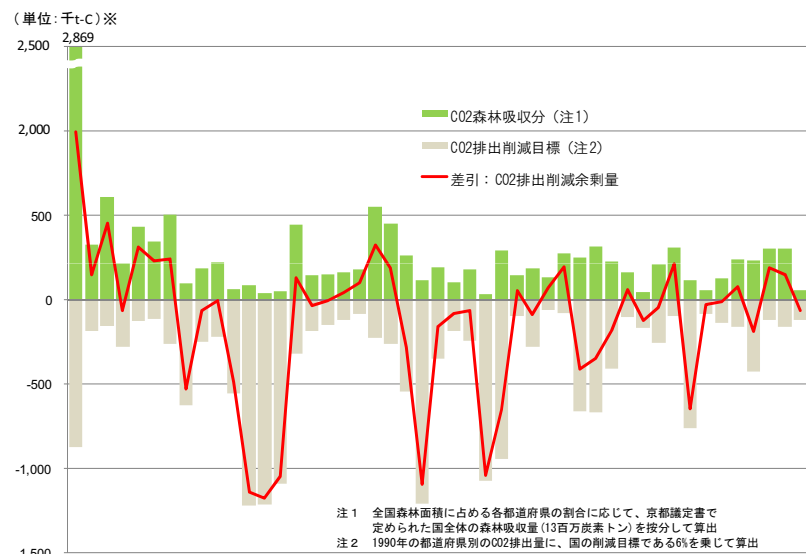
対策 地方の資源を活用した環境保全

産業活動による排出削減の負担を軽減するため、森林資源をCO₂吸収源として活用します。また、環境に貢献する農山漁村の維持・発展に必要な基盤づくりを行います。

効果 環境保全と経済活動発展の同時実現

地方の森林保全、農山漁村の基盤整備を進めることにより、国全体の発展を実現します。

CO₂排出削減目標と森林によるCO₂吸収量(試算値)



資料: 環境省「新地方公共団体実行計画策定マニュアル等改訂検討会 第2回検討会 (H20年10月27日開催) の配布資料

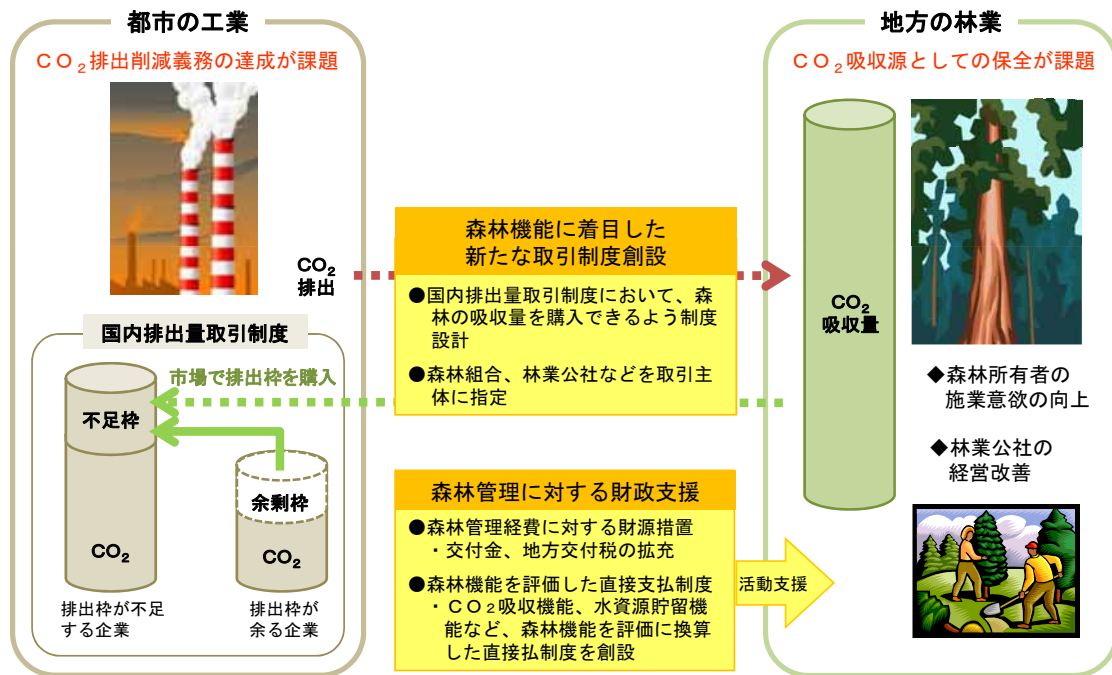
「室田委員資料: 47都道府県別CO₂排出量の推計」

林野庁「森林資源の現状(平成19年3月31日現在)」(森林面積)

※t(トン)-C 二酸化炭素を炭素換算で表示した重量

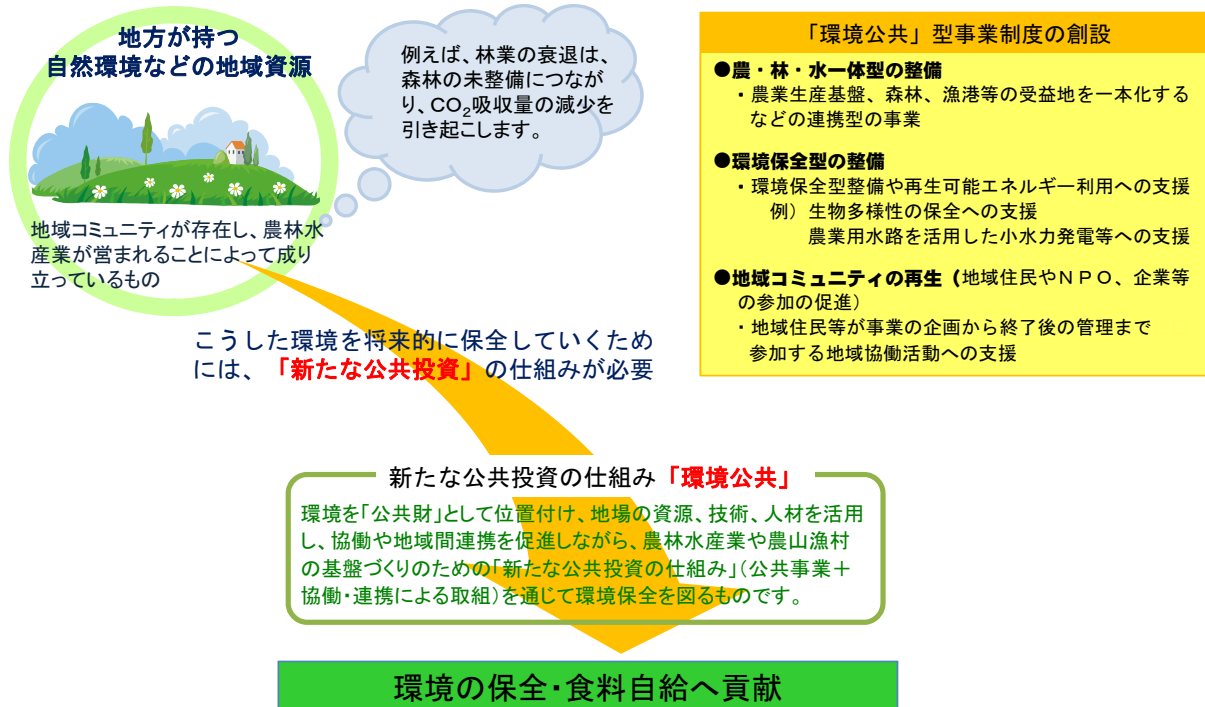
政策例 5-1 森林の管理費用に対する支援

◎ CO₂吸収源としての役割を果たしている森林を地球温暖化対策に一層活用するため、森林の機能強化に対する支援を国家的取組みとして充実



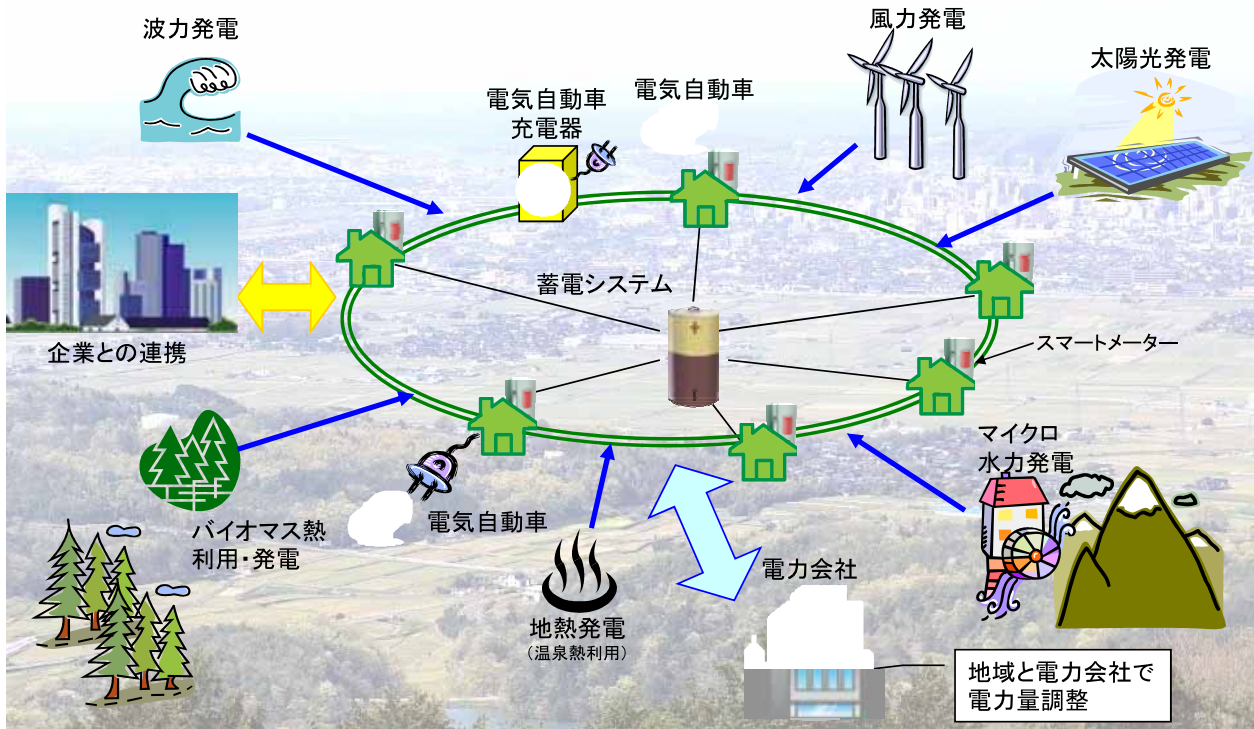
政策例 5-2 豊かな地域資源を未来に引き継ぐ「環境公共」の促進

◎ 地域住民等の協働を促進しながら、農林水産業や農山漁村の基盤づくりのための投資を行う「環境公共」型事業を創設し、地方にある環境基盤を活かした循環型社会を実現



政策例 5-3 再生可能エネルギーの地産地消

◎ 地域特性を活かした再生可能エネルギーを積極的に取り入れ、エネルギーの地産地消を推進



6. 高速交通網整備による都市と地方のネットワーク化

課題 高速交通網の整備による国土の有効活用

都市と地方の双方の特性を活かすためには、高速道路、新幹線、空路等などの高速交通網が整備されている必要があります。

対策 高速交通網が遅れた地域での整備促進

未だにネットワーク化が十分でない地方も多いため、未整備の区間を重点的に整備する必要があります。

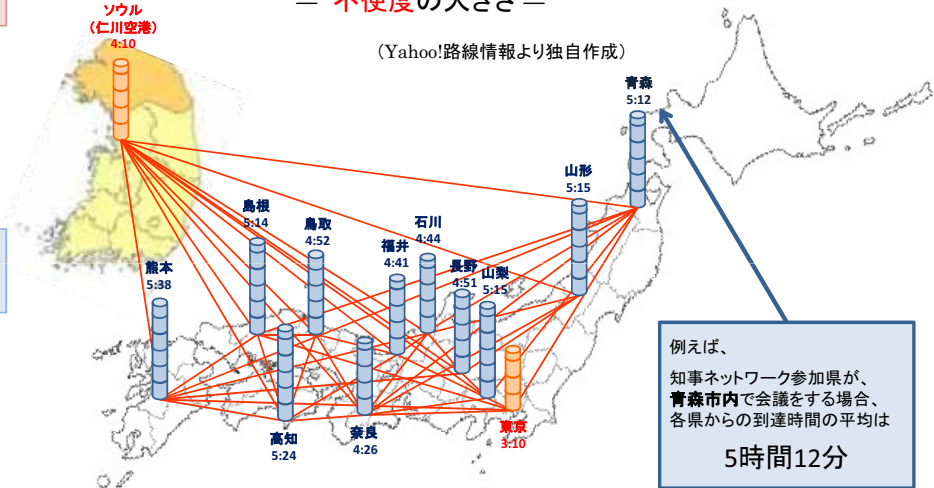
効果 全国のネットワーク化による活力向上

高速交通網の整備により、ヒトやモノの移動を円滑にすることで、各地の資源を有効に活用することが可能になります。

目的地までの平均到達時間

— 不便度の大きさ —

(Yahoo!路線情報より独自作成)



- 日本の交通ネットワークは**東京**中心
- 11県がいずれかの県に集まるよりも、**ソウル**に集まった方が平均到達時間は小さい

政策例 6 高速交通網が遅れた地域における整備促進

◎ 高速交通網の整備が遅れた地域における道路、鉄道、航空路線の整備を促進し、全国がネットワーク化されることにより、日本全体を活性化



7. 人口の地方分散を支える地域医療の確保

課題 医師配置における地域や診療科の偏在

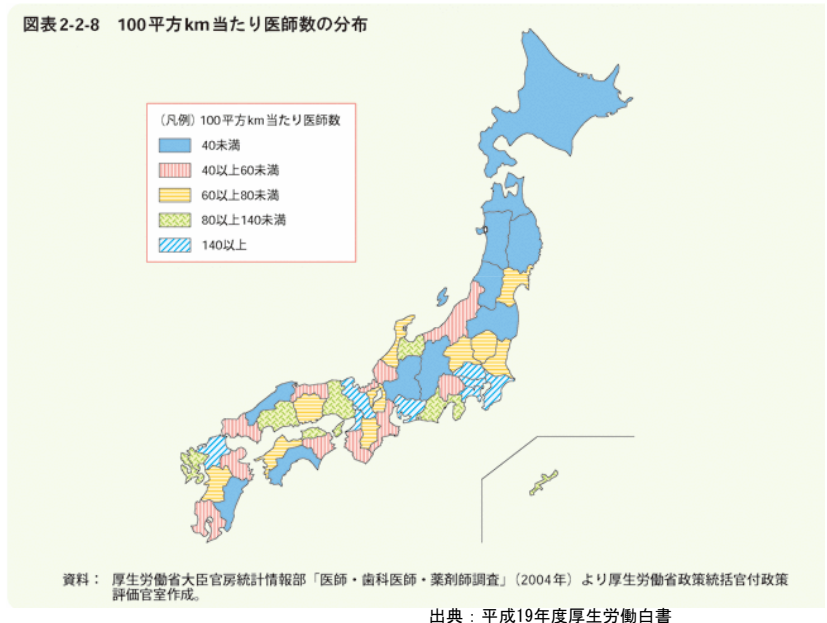
医師が特定の地域や診療科に集中し、十分な医療を受けることができない地域が生じています。

対策 医師の養成や配置の仕組みの改善

医師の養成数を増やすとともに、医師の不足する地域や診療科に誘導する施策が必要です。

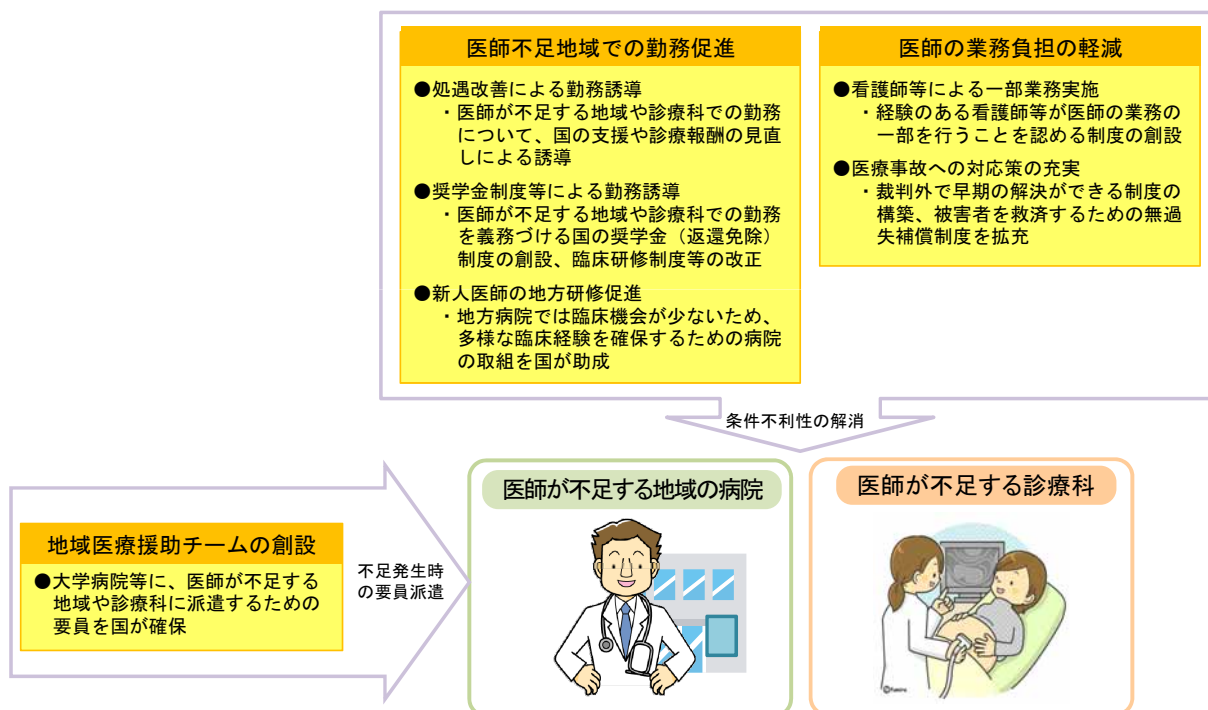
効果 全国どこでも安心して暮らせる医療確保

全国どこでも十分な医療が受けられることで、地方への人口分散が可能になります。

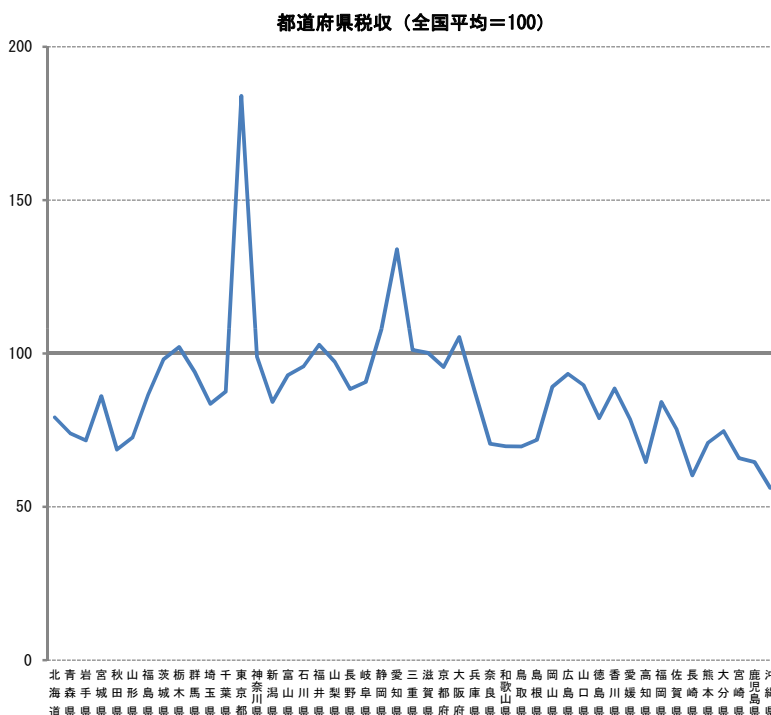
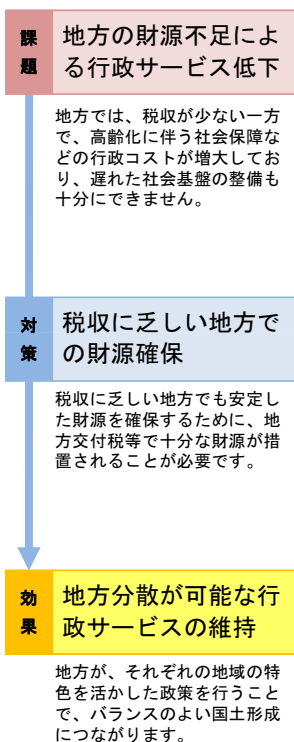


政策例 7 医師不足の地域・診療科へ医師を誘導するための総合対策

◎ 医師が不足する地域や診療科において勤務が促進される制度や、医師不足が発生した場合に速やかにスタッフを派遣できる仕組みなど、地域医療を充実

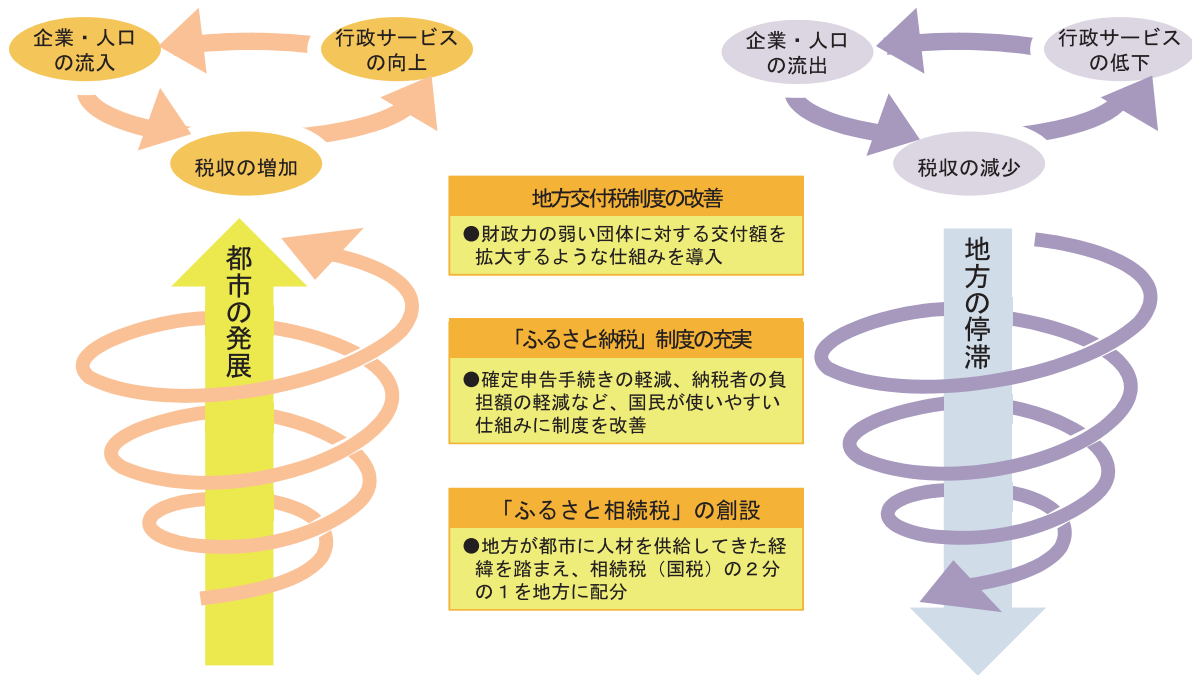


8. 地方が日本の発展に貢献するための財源確保



政策例 8 地方政府が安定的な経営を行うための財源確保

◎ 財政力の弱い地方においても必要な行政サービスが提供できるよう、地方交付税等で財源を措置。また、ふるさと納税やふるさと相続税など「ふるさと税制」を改善・強化し、寄附文化を醸成



[著者略歴]

溝 口 善兵衛 (みぞぐちぜんべえ)

昭和21 (1946) 年 1 月 20 日生

島根県益田市出身

1968年東京大学経済学部卒業、大蔵省入省。77年在西独大使館書記官。80年主計局主査、83年銀行局企画官、85年世界銀行理事代理、92年国際金融局総務課長、93年副財務官、94年在米国大使館公使、96年主計局次長、97年総務審議官、98年官房長、99年国際局長を経て、2003年財務省財務官就任。04年より国際金融情報センター理事長。07年島根県知事就任

豊かな日本をどうやってつくるか
— 地方から考える —

2010年 6 月 発行

発行 島根県政策企画局

690-8501 島根県松江市殿町一番地

島根県政策企画局

HP:<http://www.pref.shimane.lg.jp/>



この冊子は、環境にやさしい大豆油インクと再生紙を使用しています。